

第2部

学校における課題

第1章 不登校傾向のある子供たち

末富芳（日本大学 教育学部）

内藤朋枝（首都大学東京 子ども・若者貧困研究センター）

はじめに

不登校は、教育の機会を子供から奪うだけでなく、長期にわたって子供に負の影響を与えることがわかってきています（文部科学省 2014）。国や東京都においても、不登校対策として、スクールカウンセラーや、スクールソーシャルワーカーの配置をはじめ、様々な対策をとっています。しかし、依然として、不登校は学齢期の子供の抱える大きな課題です。

文部科学省は、「不登校」を「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくてもできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義しており、その定義によると、不登校の子供は1.4%（小学生0.5%、中学生3.0%）であり、過去最高となっています（文部科学省 2017）。

しかし、どのような属性の子供が不登校になり、不登校の子供がどのような状況にあるのかという情報は多くありません。これは、実際に不登校の子供の数が限られており、不登校になってしまった子供たちへのアクセスが難しいためです。

また、不登校の防止という観点からは、実際に不登校になってしまった子供たちだけでなく、「学校に行きたくない」、「学校が楽しくない」という子供たちを把握し、不登校にならないように働きかけることが必要です。

分析の目的

本章では、まずは実際に不登校の経験がある子供を把握し、次に現在学校に行っているが、行けなくなる可能性がある（不登校傾向にある）子供に焦点をあてます。さらに、それらの子供たちがどのような家庭環境にいるかを確認します。最後に不登校の心配がある子供たちが学校でどのような状況にあるかを確認し、大人や行政がどのような手を差し伸べられるかを検討します。

1 不登校経験児と不登校傾向がある子供

(1) 不登校経験児

実際に不登校の経験がある子供たちがどれほど存在するのかを集計した。小学5年生と中学2年生の調査票では、文科省の定義に沿った形ではないものの、「あなたは、これまでに以下のようなことがありましたか」との設問のうち「1か月以上学校を休んだ(病気の時をのぞく)」について、「よくあった」又は「時々あった」と回答した子供を不登校経験者と定義した。この定義によると、小学5年生の1.2%（「よくあった」0.5%、「時々あった」0.7%）、中学2年生の2.7%（「よくあった」1.9%、「時々あった」0.8%）が不登校経験者であった（図表2-1-1-1）。不登校気味の子供は調査に協力しない傾向があるとも考えられるため、実際の不登校経験率はこれよりも高いと推測されるが、それでも1.2%~2.7%の子供が、病気の時を除いても、1か月以上学校を休んだ経験があると回答している。

図表 2-1-1-1 不登校経験(小学5年生、中学2年生)

	小学5年生	中学2年生
よくあった	0.5%	1.9%
時々あった	0.7%	0.8%
あまりなかった	2.4%	1.7%
なかった	93.3%	93.1%
わからない	1.4%	1.2%
無回答	1.7%	1.3%
計	100%	100%
n (有効回答ケース数)	2833	2848

(2) 不登校傾向がある子供たち

「学校に行きたくない」と頻繁に感じている子供は不登校になる可能性があると考え、このような子供たちを「不登校傾向がある子供」と定義して、その割合を集計した。具体的には、小学5年生、中学2年生では、「学校に行きたくないと思った」ことがありましたか」の設問に対して、「よくあった」と答えた者を「不登校傾向がある」、16-17歳では、現在学校に在籍している子供のうち、「学校をやめたくなるほど、悩んだことがありますか」という調査項目に対して、「学校をやめたくなるほど悩んだことはない」と回答した者を「不登校傾向なし」とし、それ以外の者を「不登校傾向あり」と定義した。

その結果、小学5年生、中学2年生においては、不登校傾向がある子供は約1割(小学5年生11.8%、中学2年生12.7%)である一方、16-17歳においては31.7%と約3割であった(図表2-1-1-2、2-1-1-3)。16-17歳の子供において、この率が高いのは質問の仕方が異なることも理由として考えられる。

図表 2-1-1-2 不登校傾向(「学校に行きたくないと思った」頻度)(小学 5 年生、中学 2 年生)

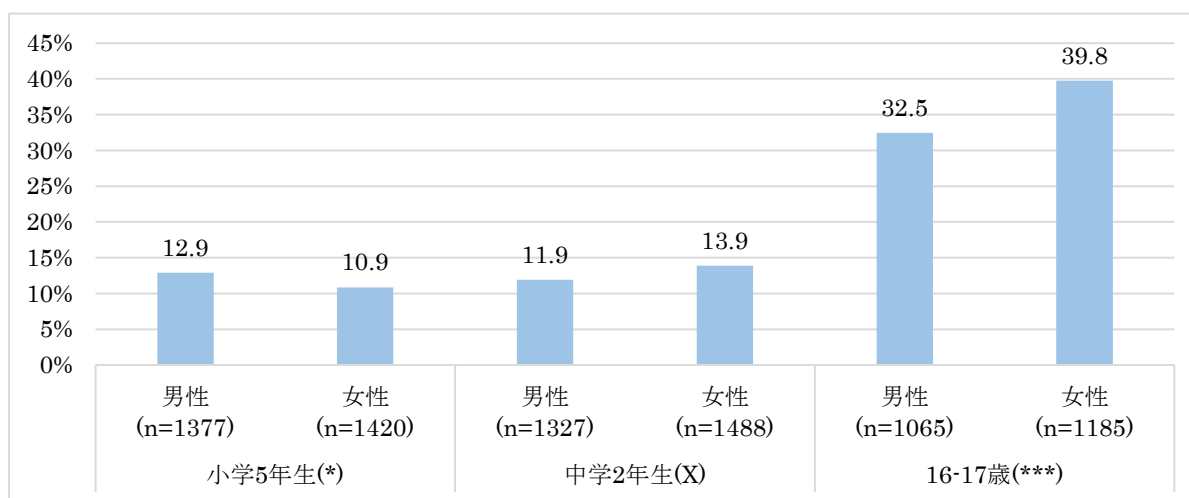
	小学 5 年生 (n=2833)	中学 2 年生 (n=2848)
よくあった	11.8%	12.7%
時々あった	28.5%	27.8%
あまりなかった	22.2%	24.0%
なかった	33.7%	31.8%
わからない	2.6%	2.5%
無回答	1.3%	1.2%
計	100%	100%

図表 2-1-1-3 不登校傾向(学校をやめたくなるほど、悩んだ経験の有無)(16-17 歳 n=2560)

やめたくなるほど悩んだことがある	31.7%
やめたくなるほど悩んだことがない	56.1%
無回答	12.2%
計	100%

男女別に見ると、小学 5 年生と 16-17 歳のみ有意な違いが確認された(図表 2-1-1-4)。小学 5 年生では男子の方が不登校傾向のある子供の割合が高いが、16-17 歳では、女子の方が不登校傾向の割合が高くなっている。なお、中学 2 年生は女子の割合が高かったが、統計的に有意ではなく、誤差の範囲である。

図表 2-1-1-4 不登校傾向の割合(小学 5 年生、中学 2 年生、16-17 歳):性別



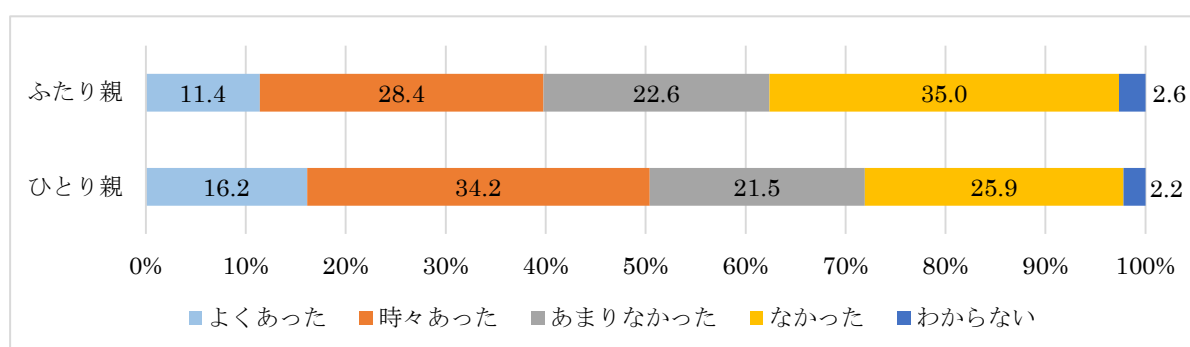
*無回答は除く。

2 家庭の状況

(1) 世帯タイプ別

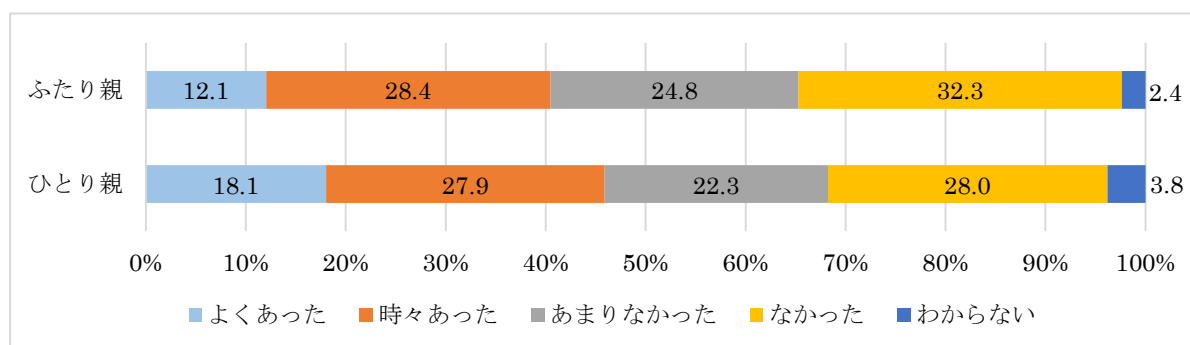
どのような家庭の子供が不登校傾向にあるのかを検討するために、まず、世帯タイプ別の不登校傾向の割合を見た。小学5年生と中学2年生ではひとり親世帯でやや心配な子供の割合が高い傾向が見られる。小学5年生ではふたり親世帯の11.4%に比べ、ひとり親世帯では16.2%、中学2年生ではふたり親世帯の12.1%と比べて18.1%が学校に行きたくないと思ったことが「よくあった」と回答している(図表2-1-2-1、2-1-2-2)。

図表 2-1-2-1 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):世帯タイプ別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-2-2 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):世帯タイプ別(**)

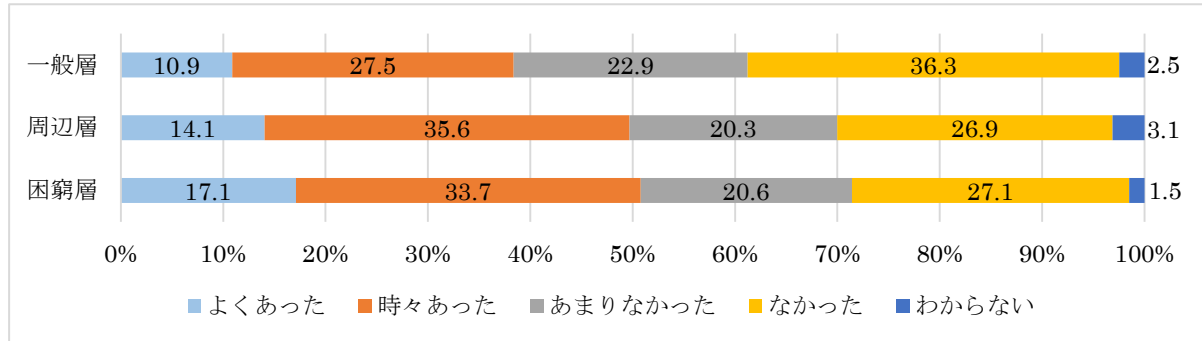


*無回答は除く。

(2) 生活困難度別

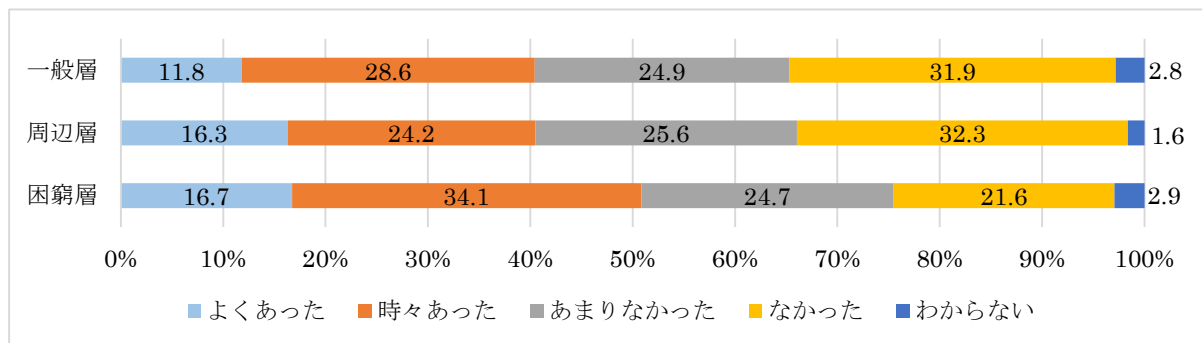
生活困難度別に見ると、全ての年齢層において、困窮層、周辺層の方が一般層に比べて、不登校傾向のある子供の割合が高い。特に困窮層は、小学5年生では17.1%、中学2年生で16.7%、16-17歳では45.9%と他の層より高い傾向がある（図表2-1-2-3、2-1-2-4、2-1-2-5）。

図表 2-1-2-3 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):生活困難度別(***)



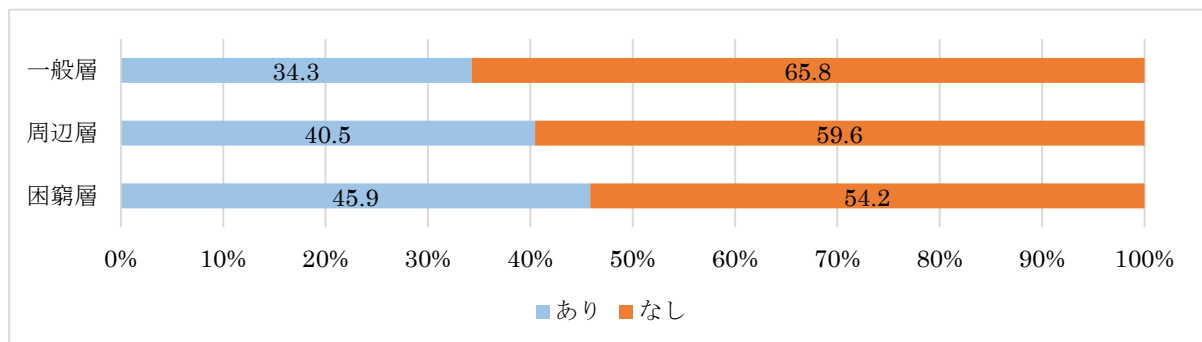
*無回答は除く。

図表 2-1-2-4 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):生活困難度別(**)



*無回答は除く。

図表 2-1-2-5 「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験の有無(16-17歳):生活困難度別(***)

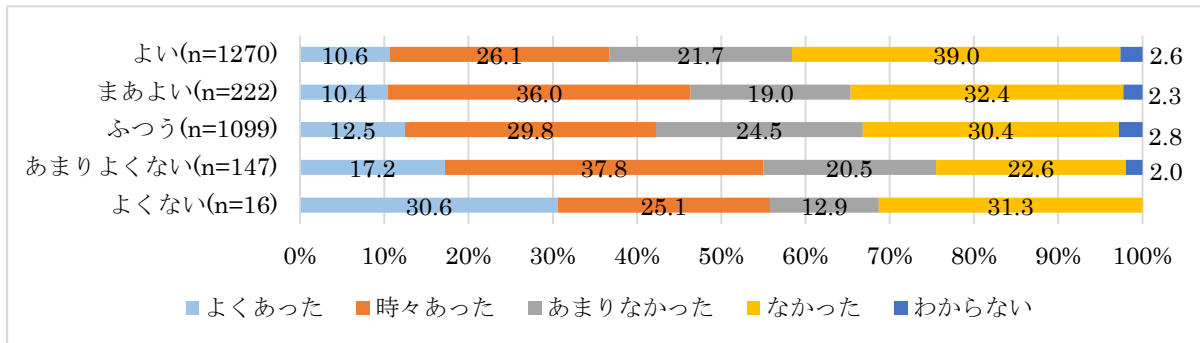


*無回答は除く。

(3) 保護者の健康状態

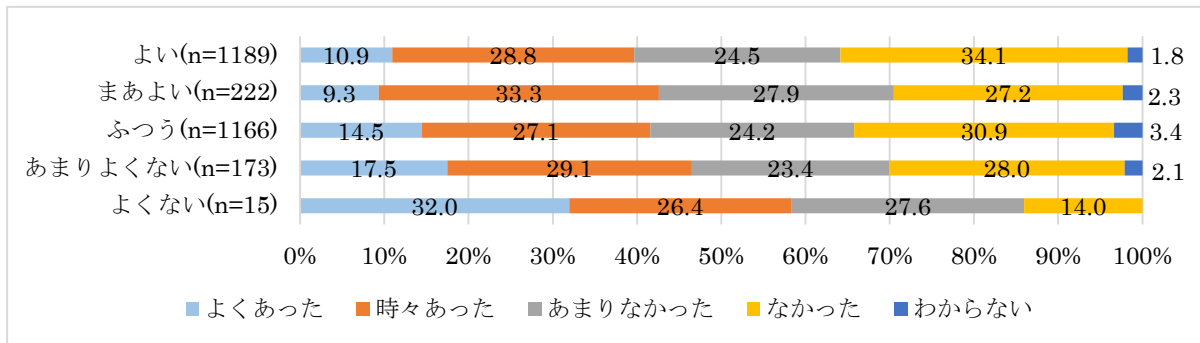
体調不良などにより保護者が子供をケアできないために、不登校になることもあると考えられる。そこで、保護者の健康状態別に不登校傾向を見たところ、保護者の健康状態が「よくない」場合、小学5年生の30.6%、中学2年生の32.0%の子供が「学校に行きたくないと思った」ことが「よくあった」と答えている（図表 2-1-2-6、2-1-2-7）。16-17 歳では保護者の健康状態があまりよくない子供で不登校の懸念が見られる。

図表 2-1-2-6 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):保護者の健康状態別(***)



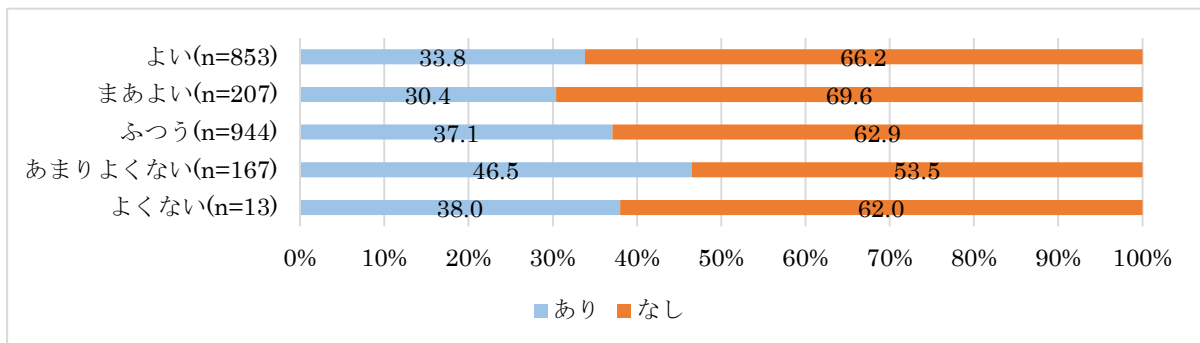
*無回答は除く。

図表 2-1-2-7 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):保護者の健康状態別(**)



*無回答は除く。

図表 2-1-2-8 「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験の有無(16-17歳):保護者の健康状態別(**)



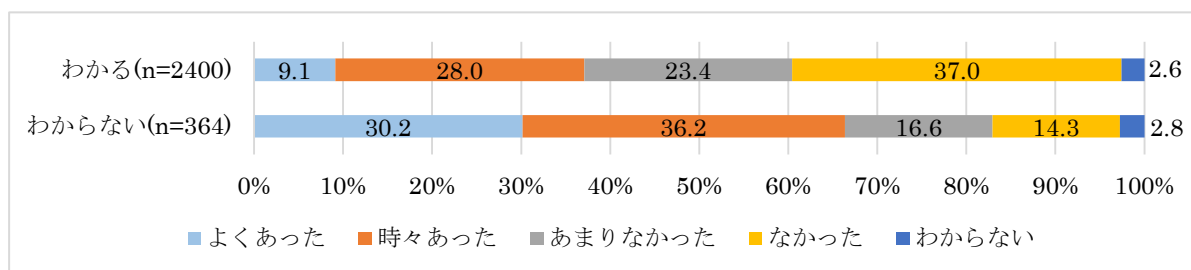
*無回答は除く。

3 不登校傾向と学力

(1) 授業がわからない子供と不登校傾向

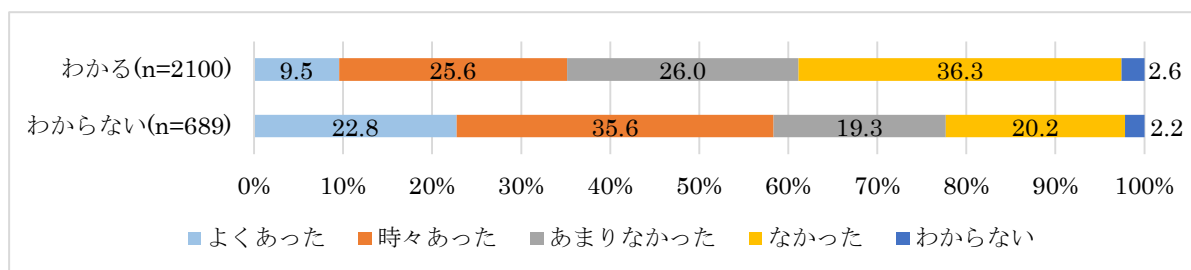
不登校傾向が見られる子供たちの学校での状況について見ていく。学校の授業の理解度と「学校に行きたくないと考えた」頻度は統計的に有意な関連がある。小学5年生では、授業が「わかる」子供のうち、「学校に行きたくないと考えた」経験が「よくあった」と回答した子供が9.1%であるのに対し、授業が「わからない」子供では30.2%が「学校に行きたくないと考えた」経験が「よくあった」と回答している(図表2-1-3-1)。また、中学2年生では、授業が「わかる」子供の9.5%、「わからない」子供の22.8%が「学校に行きたくないと考えた」経験が「よくあった」と回答している(図表2-1-3-2)。更に16-17歳では、授業が「わからない」子供で「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」ものは51.7%であった(図表2-1-3-3)。

図表 2-1-3-1 「学校に行きたくないと考えた」頻度(小学5年生):授業の理解度別(***)



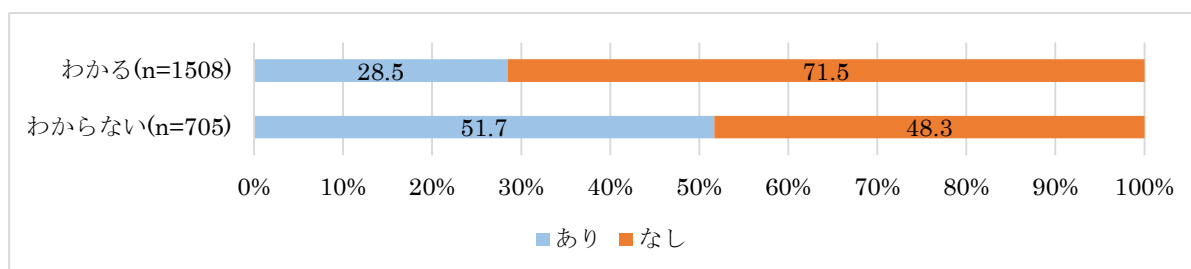
*無回答は除く。

図表 2-1-3-2 「学校に行きたくないと考えた」頻度(中学2年生):授業の理解度別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-3-3 「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験の有無(16-17歳):授業の理解度別(***)



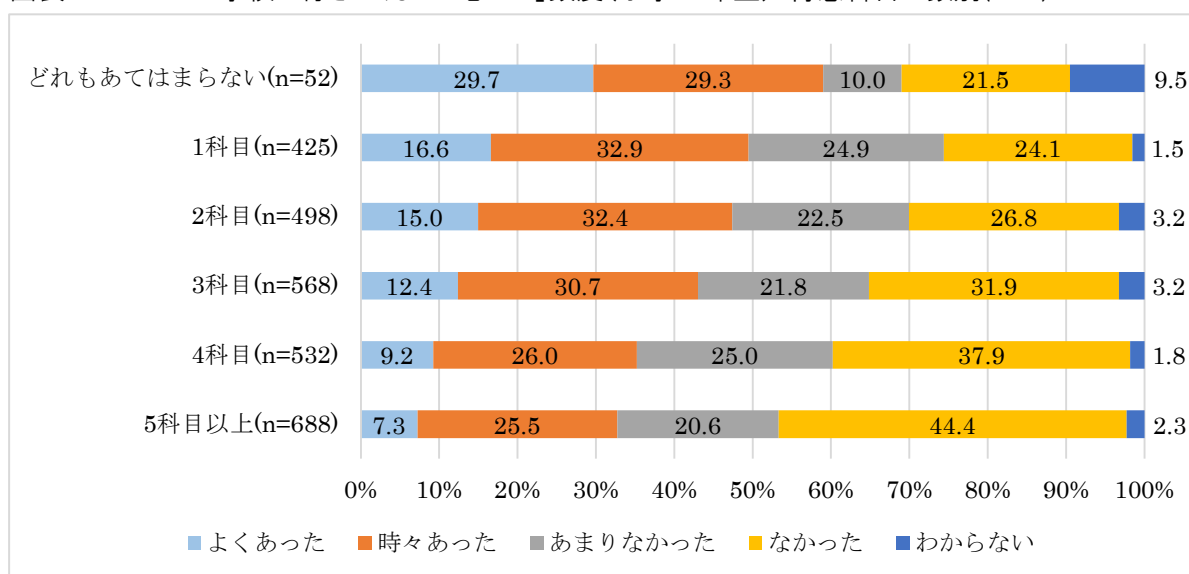
*無回答は除く。

(2) 得意科目の有無と不登校傾向

「あなたの得意な教科は、どれですか。」の設問に対する回答を用いて、得意な科目の数を集計した。着目するのは、得意科目について「どれもあてはまらない」（得意科目がない）と答えた子供たちである。これらの子供の状況を見ると、小学5年生の29.7%、中学2年生の36.0%、16-17歳の52.6%が「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」と答えており、得意科目が1科目と答えた子供に比べても高いことがわかった（図表2-1-3-4、2-1-3-5、2-1-3-6）。

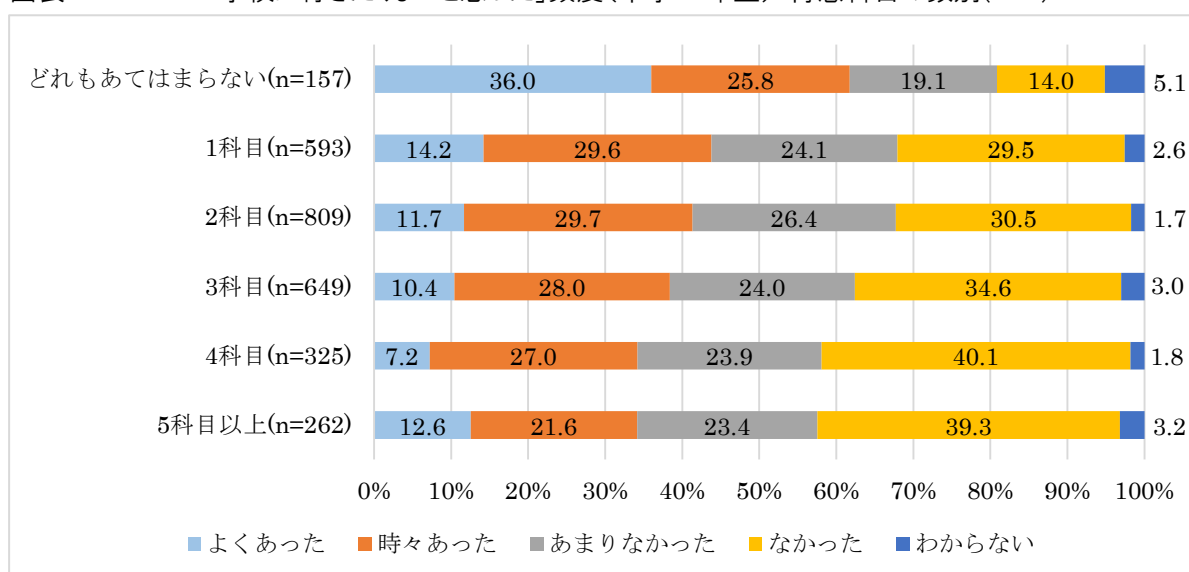
得意科目数について見ると、全体的に得意科目数が多いと学校へ行きたくない気持ちになる子供の割合が下がる傾向が見られ、この傾向は特に学年の低い小学5年生で見られる。

図表 2-1-3-4 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):得意科目の数別(***)



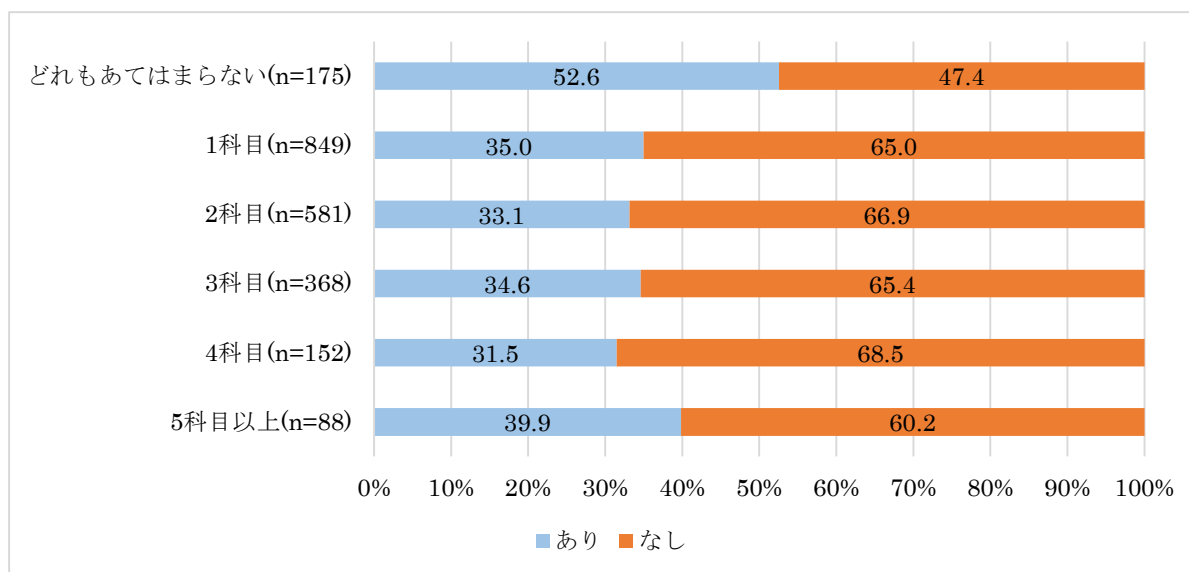
*無回答は除く。

図表 2-1-3-5 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):得意科目の数別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-3-6 「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験の有無(16-17 歳):得意科目の数別 (***)



*無回答は除く。

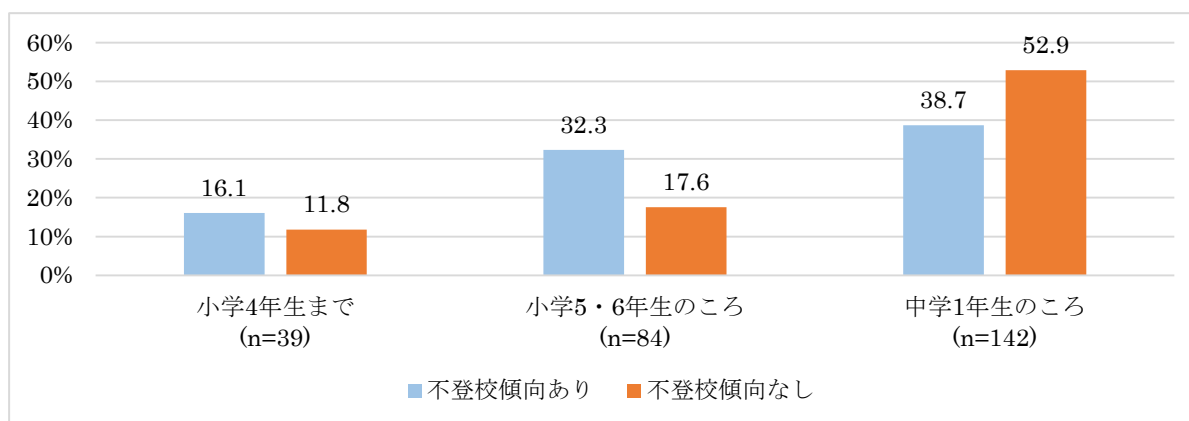
(3) 不登校傾向のある子供の学校生活

これら不登校傾向と学力の関係は、不登校傾向がある子供たちに、生活困難層など不利を抱えている子供たちが多いということの表れかもしれない¹。そこで、困窮層であり、かつ、授業がわからない子供に限って、いつから授業が難しくなったのかを見た(図表 2-1-3-7)。なお、ここでは、文部科学省(2017)の定義による不登校児童数が中学生では、小学生の6倍であることを踏まえて、中学生のデータを用いている。

すると、困窮層の中でも、不登校傾向がある子供は、授業がわからなくなる時期が、小学4年生までである割合、小学5・6年生である割合が、不登校傾向がない子供よりも多いことがわかる。同じく生活困難を抱えており、同じように「授業がわからない」と訴えている子供たちの中においても、不登校傾向がある子供は、早い時期から授業についていけなくなっている。つまり、生活困難度の影響を取り除いても、学力と不登校傾向には関連があると推測される。ただし、ここで示されているのは両者の関連であって、因果関係ではない。学力と不登校傾向の関連においては、「学業上の問題を抱えることで学校を休みがちになる」という因果の向きだけでなく、「学校を休みがちになることで学業上の問題を抱える」という因果の向きも考えられる。また、不登校傾向には多様な要因があると推測され、学力のみによって説明されるものでもない。

¹ 文部科学省が行う「全国学力・学習状況調査」では、子供の学力を測定するだけでなく、子供の置かれた家庭環境等を明らかにするために、その保護者に対しても質問紙調査を行っている。文部科学省から委託を受けたお茶の水女子大学の研究チームは、これらのデータを分析し、世帯所得、保護者の学歴等から作成される「SES(社会経済的背景)尺度スコア」が高いほど、子供の試験結果も良くなる傾向があることを示した(お茶の水女子大学 2014: p.57-70)。また、子供の生活実態調査においても、生活が困窮するほど授業の理解度や主観的な成績評価が悪化する傾向があることが示されている(東京都福祉保健局 2017: p.66-73)。

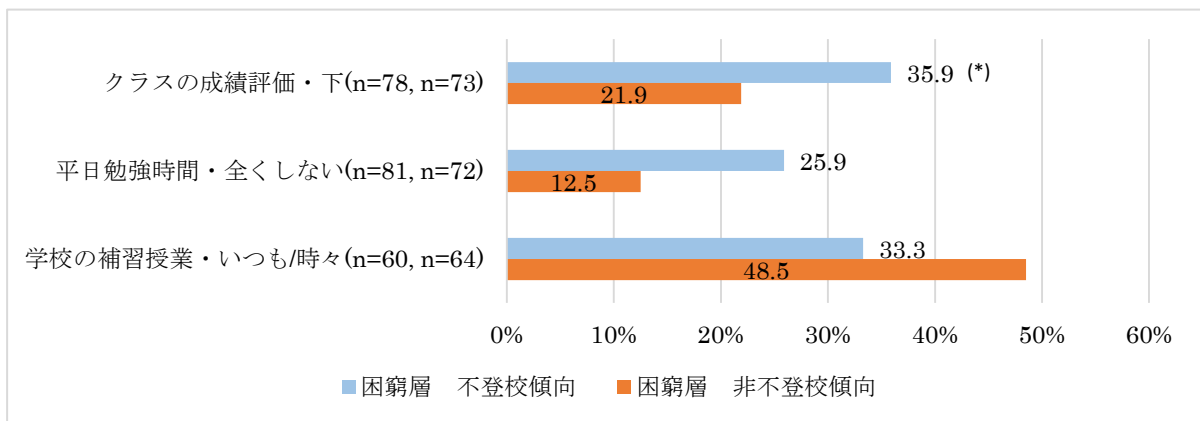
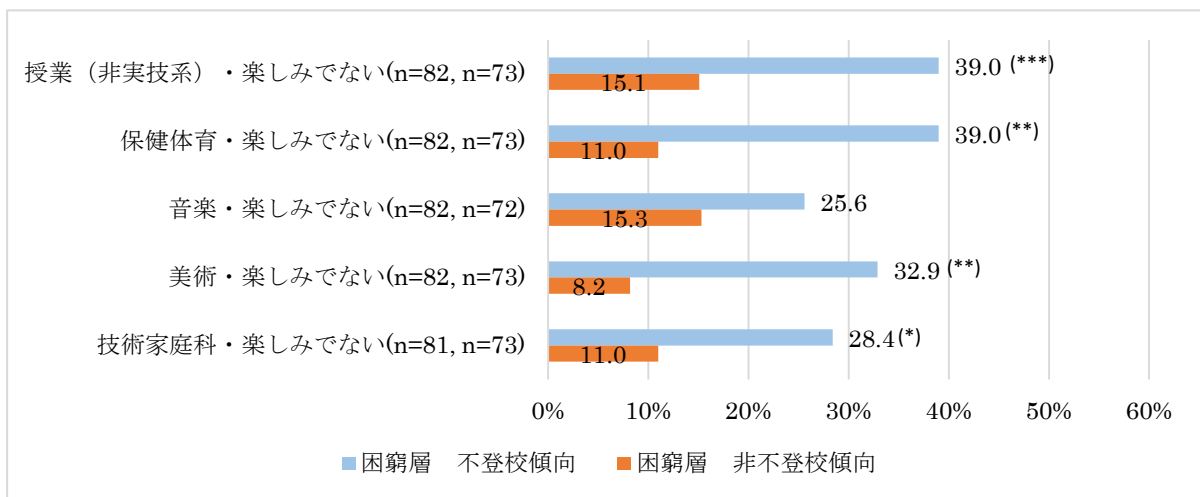
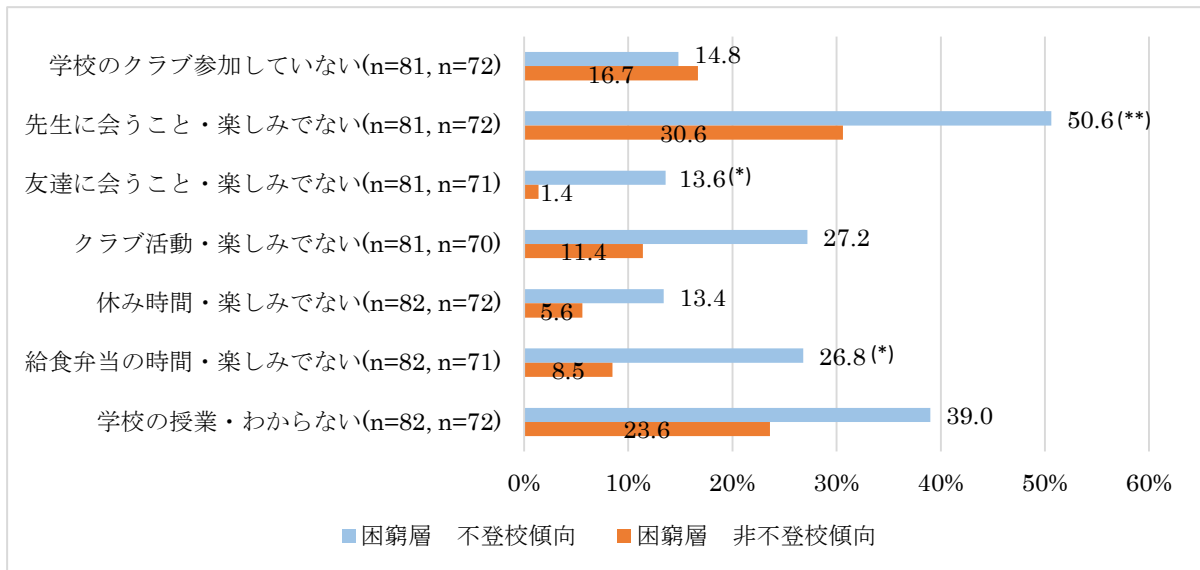
図表 2-1-3-7 困窮層の授業が難しくなった時期(中学2年生):不登校傾向の有無別



次に、困窮層の子供に限って、不登校傾向が「ある」子供と、「ない」子供において、授業以外の時間も含め、学校生活を楽しんでいるかに違いがあるのかを見たのが以下である(図表 2-1-3-8)。不登校傾向の子供は、非実技系(5教科)のほかに保健体育、美術も「楽しみでない」と答えた子供の割合が高く、「先生に会うこと」が「楽しみではない」子供は50.6%に達している。不登校傾向のある子供は、単に5教科の勉強が得意でない、授業がわからないという学力面だけに問題を抱えているわけではなく、保健体育や美術、音楽などの教科、クラブ活動や給食・弁当の時間も楽しめる要素が少ない子供の割合が高いことがわかる。

本来は授業についていけない子供のために行われる学校の補習教室の参加率が低いことについては、補習教室への参加を促す一層の努力が必要なことを示唆している。

図表 2-1-3-8 困窮層の子供の学校生活(中学 2 年生):不登校傾向の有無別



*n 値は左から困窮層不登校傾向、困窮層非不登校傾向

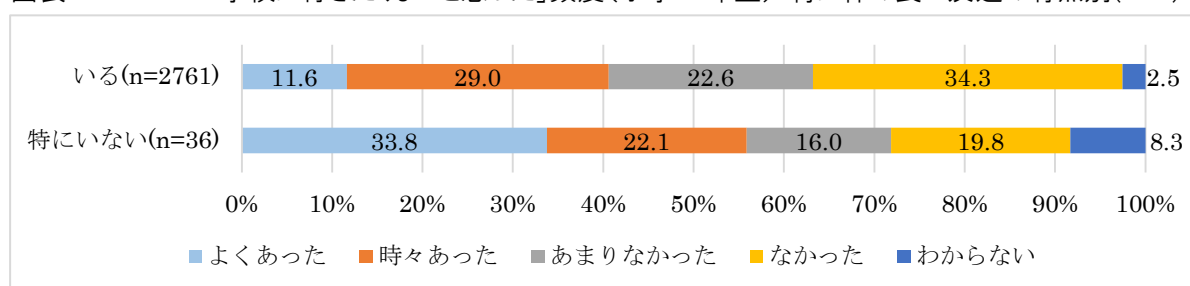
4 不登校傾向と交友関係

(1) 一番仲の良い友達の有無

不登校傾向がある子供の交友関係を見ていく。学業だけでなく、仲の良い友達がいることが不登校を引き下げると考えられるからである。逆に、友達がいらないということは不登校傾向を高くすると考えられる。

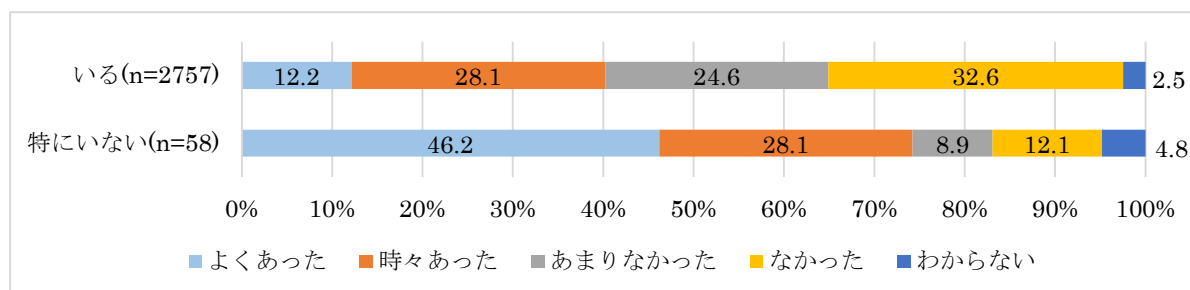
小学5年生では、「とくに仲の良い友達はいない」と回答した子供で、学校に行きたくないと思った経験がよくあった子供は33.8%、また、中学2年生でも46.2%と高い(図表2-1-4-1、2-1-4-2)。どちらも、仲の良い友達がいる子供に比べて、仲の良い友達がいらない子供は不登校傾向があるという結果が得られた。なお16-17歳票には適当な設問がないため、分析できない。

図表 2-1-4-1 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):特に仲の良い友達の有無別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-4-2 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):特に仲の良い友達の有無別(***)

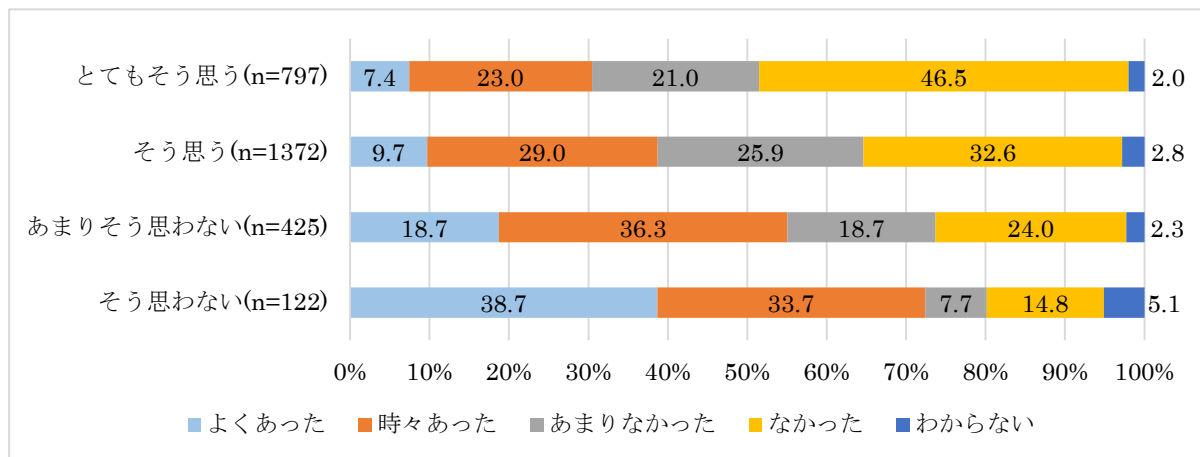


*無回答は除く。

(2) 友人関係における主観—「好かれていると思う」

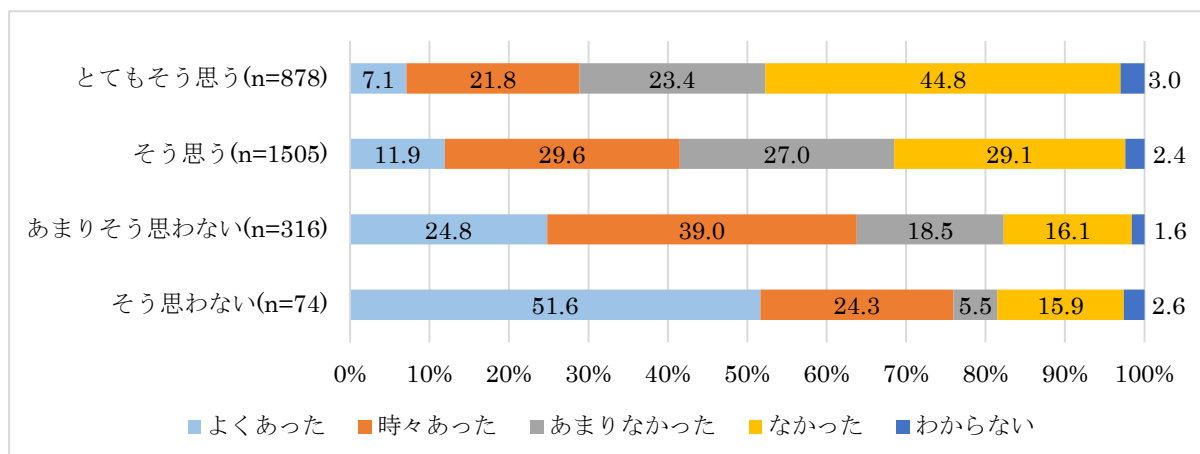
小学5年生では、友達に好かれていると「思わない」と答えた子供のうち、38.7%が「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」と回答している(図表2-1-4-3)。また中学2年生では、好かれていると「思わない」と答えた子供の51.6%が、「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」と回答している(図表2-1-4-4)。16-17歳では、「自分は友達に好かれている」と「思わない」と回答した子供の76.6%に不登校のリスクがあるとの結果であった(図表2-1-4-5)。友達に好かれていると「とてもそう思う」と回答した子供との差は、3倍以上であった(「とてもそう思う」24.7%、「思わない」76.6%)。

図表2-1-4-3 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学5年生):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)



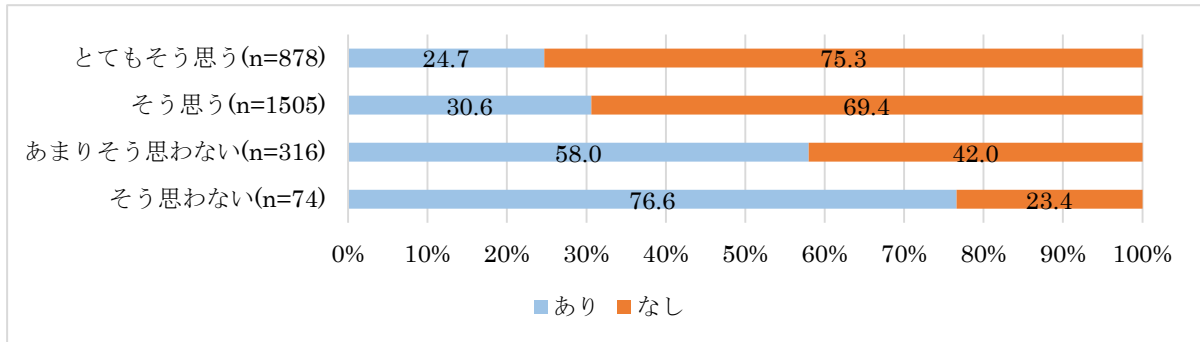
*無回答は除く。

図表2-1-4-4 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学2年生):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-4-5 「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験(16-17 歳):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)

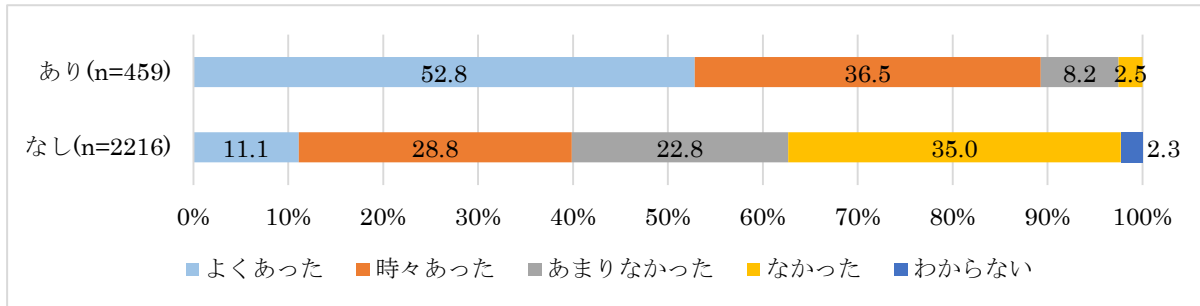


*無回答は除く。

5 不登校傾向といじめられた経験

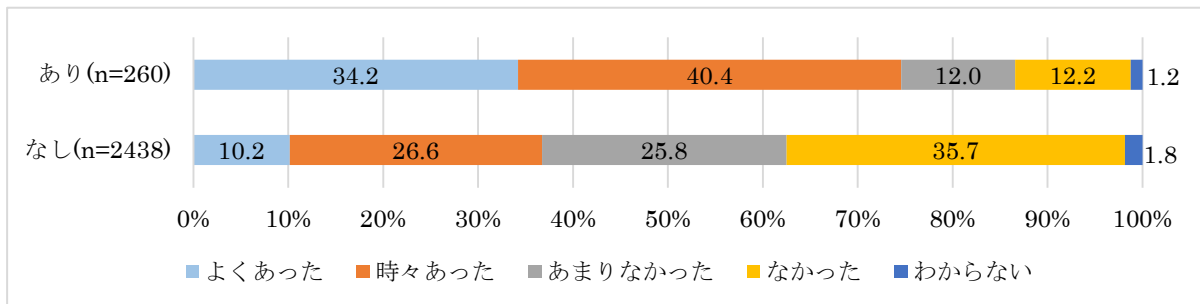
「いじめられた」経験は、不登校傾向と非常に関連性が強い。小学 5 年生においては、いじめられた経験がよくあった子供で、学校に行きたくないと思った経験がよくあった割合が 52.8%、時々あったと回答した子供も 36.5%と全体的に非常に高い(図表 2-1-5-1)。中学 2 年生において、いじめられた経験がよくあったと答えた回答者の中で、学校に行きたくないと思った経験がよくあった割合が 34.2%である一方、いじめられた経験がなかった子供で、学校に行きたくないと思った経験がなかった割合は、35.7%だった(図表 2-1-5-2)。なお 16-17 歳票には適当な設問がないため、分析できない。

図表 2-1-5-1 「学校に行きたくないと思った」頻度(小学 5 年生):いじめられた経験別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-5-2 「学校に行きたくないと思った」頻度(中学 2 年生):いじめられた経験別(***)



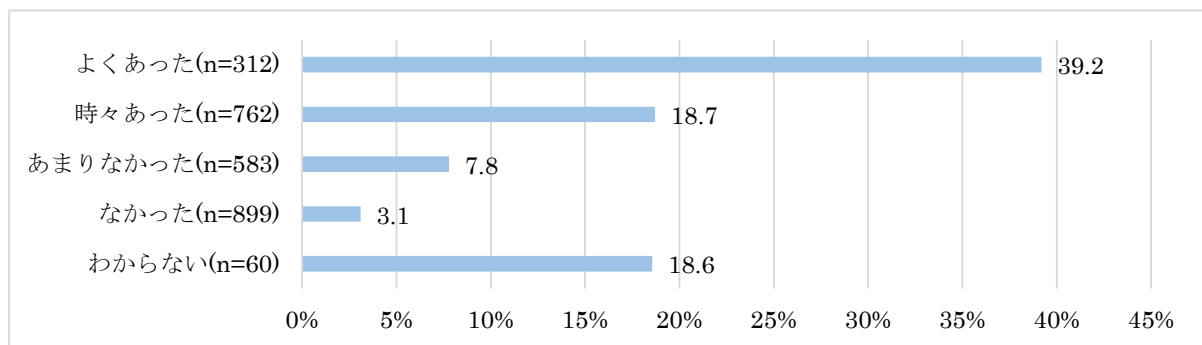
*無回答は除く。

6 不登校傾向と抑うつ傾向

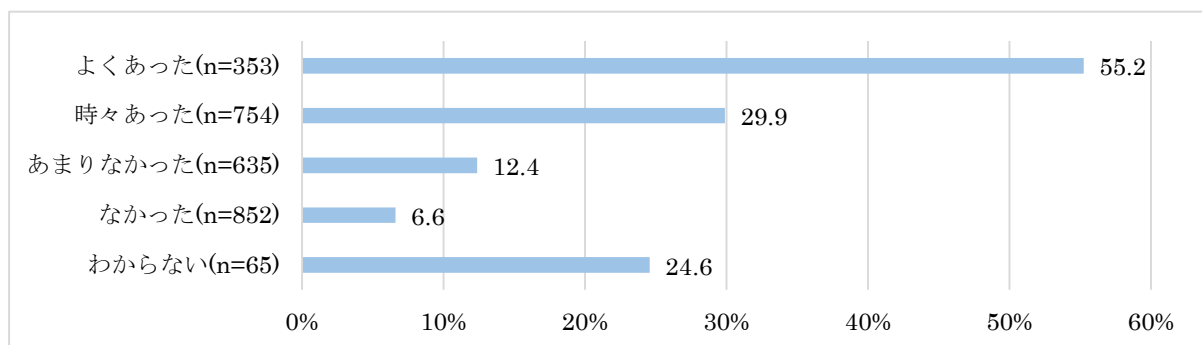
子供の生活実態調査では、子供の精神的状態を測定する尺度として「子供用バールソン自己記入式抑うつ尺度」²を用いた。この尺度は、最近1週間の心の状態に関する18項目の設定について、子供自身が3段階評価を行うものであり、選択肢に応じてそれぞれ0~2点で指標化し、その合計が16点以上であった場合、抑うつ傾向があると判断される。なお、ここでは全ての項目を回答しているもののみを分析対象としている。また、この尺度は、あくまで子供の最近の精神状態を示すものであり、疾患の有無を判断するものではない。

「学校に行きたくないと思った」頻度及び「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験の有無別に抑うつ傾向のある子供の割合を見ると、有意な関連があった(図表2-1-6-1、2-1-6-2、2-1-6-3)。小学5年生と中学2年生においては、「わからない」を除くと、「学校に行きたくないと考えた」頻度が多い層ほど、抑うつ傾向を持つ子供の割合が高くなる傾向がある。また、16-17歳においては「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験を持つ層の方が、そうでない層よりも抑うつ傾向を持つ者の割合が高い。「学校に行きたくないと」思うことで子供の精神状態が不安定になるのか、あるいは精神状態が不安定になることで「学校に行きたくないと」思いがちになるのか、その因果の向きは不明ではあるが、不登校傾向と子供の精神状態には何らかの関連があると推測される。

図表 2-1-6-1 抑うつ傾向(小学5年生):「学校に行きたくないと考えた」頻度別(***)

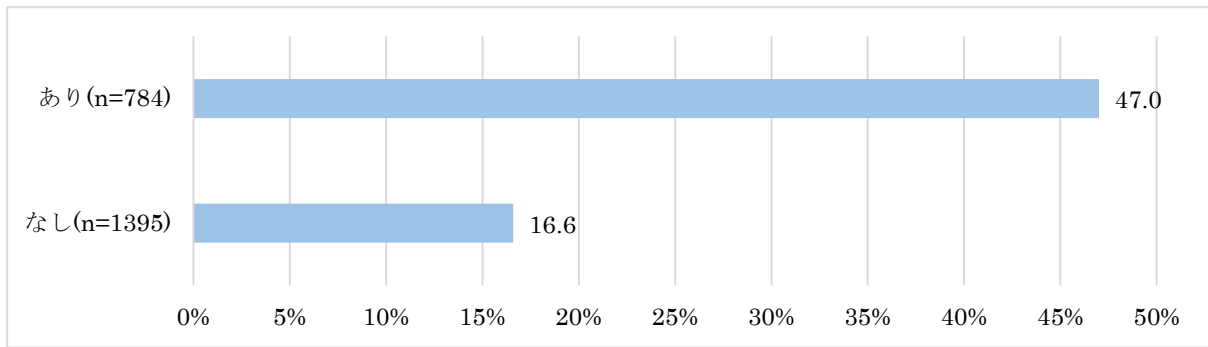


図表 2-1-6-2 抑うつ傾向(中学2年生):「学校に行きたくないと考えた」頻度別(***)



² 「子供用バールソン自己記入式抑うつ尺度」は、Depression Self-Rating Scale for Children (DSRS-C)の日本語版(村田他 1996)であり、信頼性と妥当性が確認された尺度として国内外で広く用いられている。

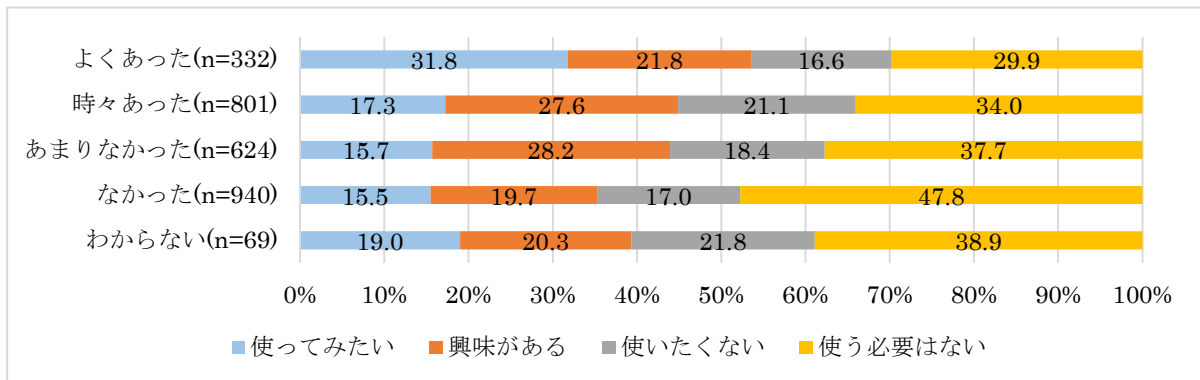
図表 2-1-6-3 抑うつ傾向(16-17 歳):「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験有無別(***)



7 施設の利用意向

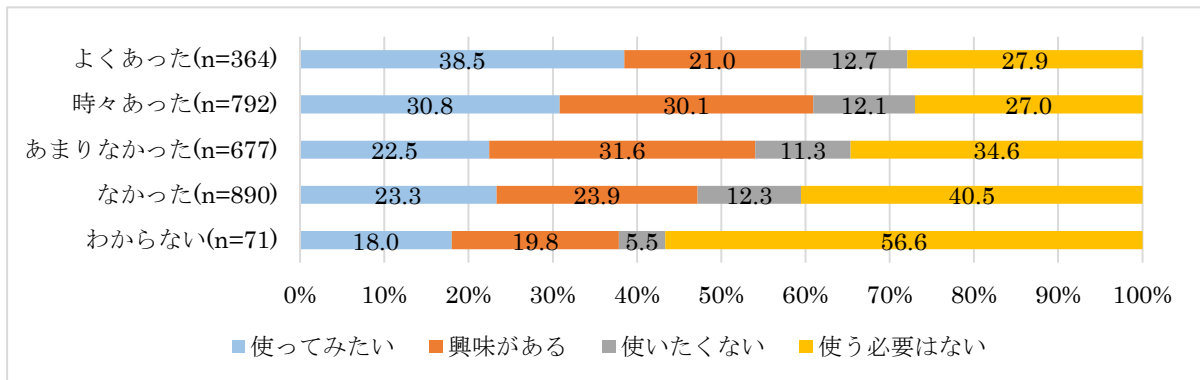
有効な支援策について検討するため、不登校傾向のある子供の施設の利用意向を見る。「家以外で平日の放課後に夜までいられる場所」の利用意向は、どの年齢層においても「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」子供で高く、小学5年生の31.8%、中学2年生の38.5%、16-17歳の40.3%が「使ってみたい」と回答している(図表2-1-7-1、2-1-7-2、2-1-7-3)。

図表 2-1-7-1 家以外で平日の放課後に夜までいられる場所の利用意向(小学5年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



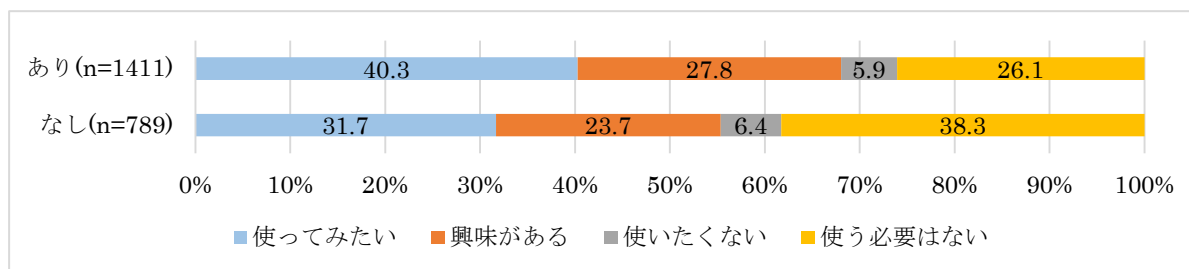
*無回答は除く。

図表 2-1-7-2 家以外で平日の放課後に夜までいられる場所の利用意向(中学2年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



*無回答は除く。

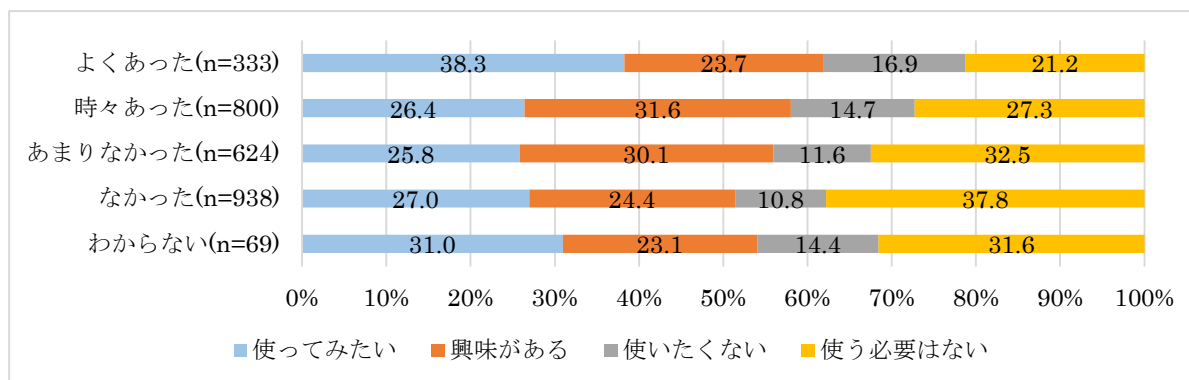
図表 2-1-7-3 家以外で平日の放課後に夜までいられる場所の利用意向(16-17 歳):「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験有無別(***)



*無回答は除く。

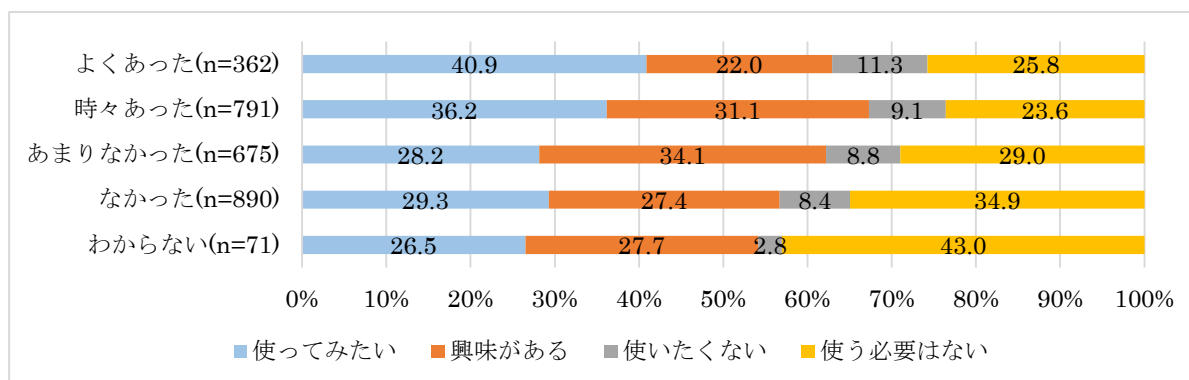
「家以外で休日にいることができる場所」についても、不登校傾向がある子供で利用意向が高い傾向が見られる。小学 5 年生で 38.3%、中学 2 年生で 40.9%、16-17 歳においても 40.7%と不登校傾向がある子供で利用意向が最も高い（図表 2-1-7-4、2-1-7-5、2-1-7-6）。

図表 2-1-7-4 家以外で休日にいることができる場所の利用意向(小学 5 年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



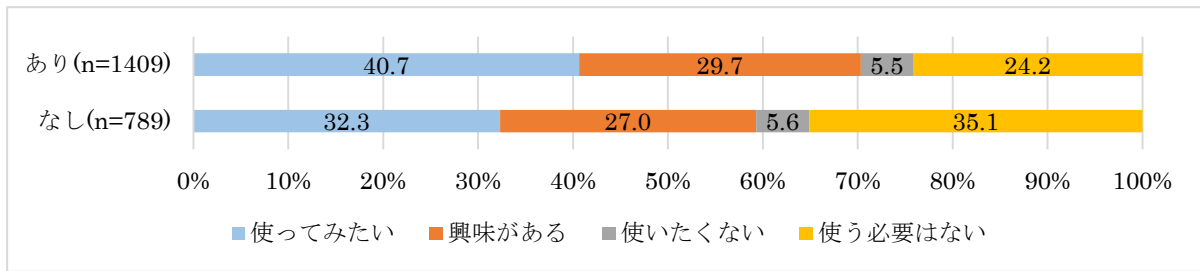
*無回答は除く。

図表 2-1-7-5 家以外で休日にいることができる場所の利用意向(中学 2 年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



*無回答は除く。

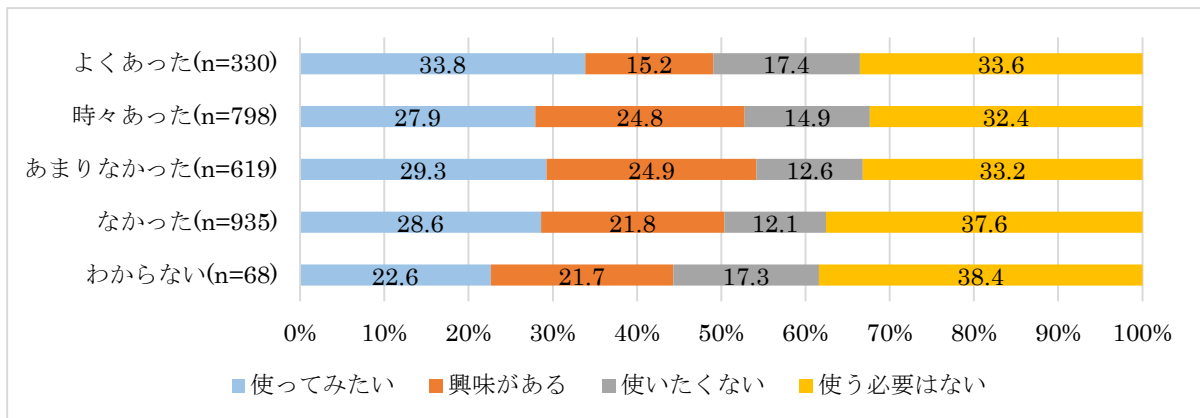
図表 2-1-7-6 家以外で休日にいることができる場所の利用意向(16-17歳):「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験有無別(***)



*無回答は除く。

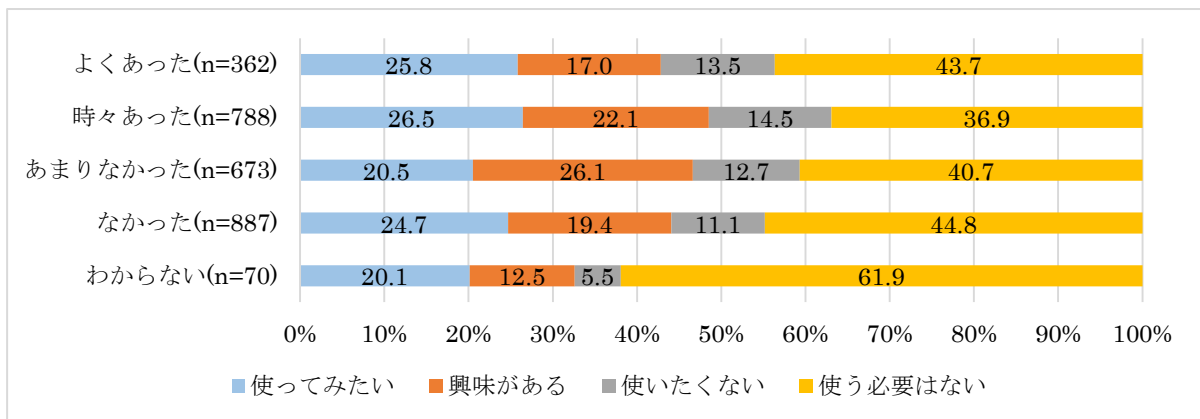
「家の人がない時、夕ごはんを皆で食べられる場所」についても、不登校傾向がある子供で利用意向がやや高い傾向がある。小学5年生で33.8%、中学2年生では25.8%、16-17歳では30.2%という結果が得られている(図表2-1-7-7、2-1-7-8、2-1-7-9)。

図表 2-1-7-7 家の人がない時、夕ごはんを皆で食べられる場所の利用意向(小学5年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(**)



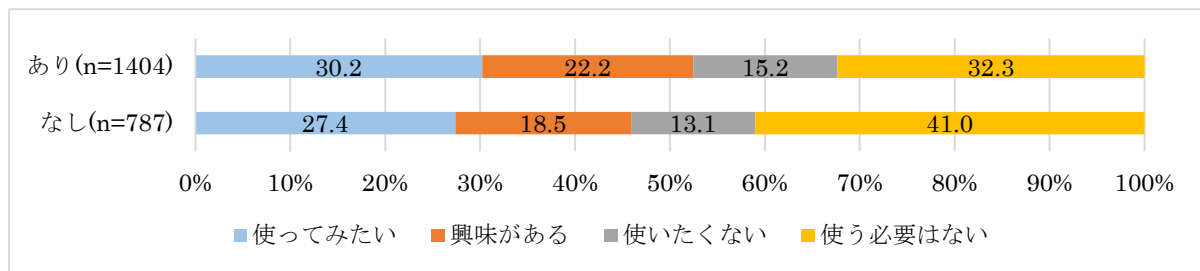
*無回答は除く。

図表 2-1-7-8 家の人がない時、夕ごはんを皆で食べられる場所の利用意向(中学2年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(**)



*無回答は除く。

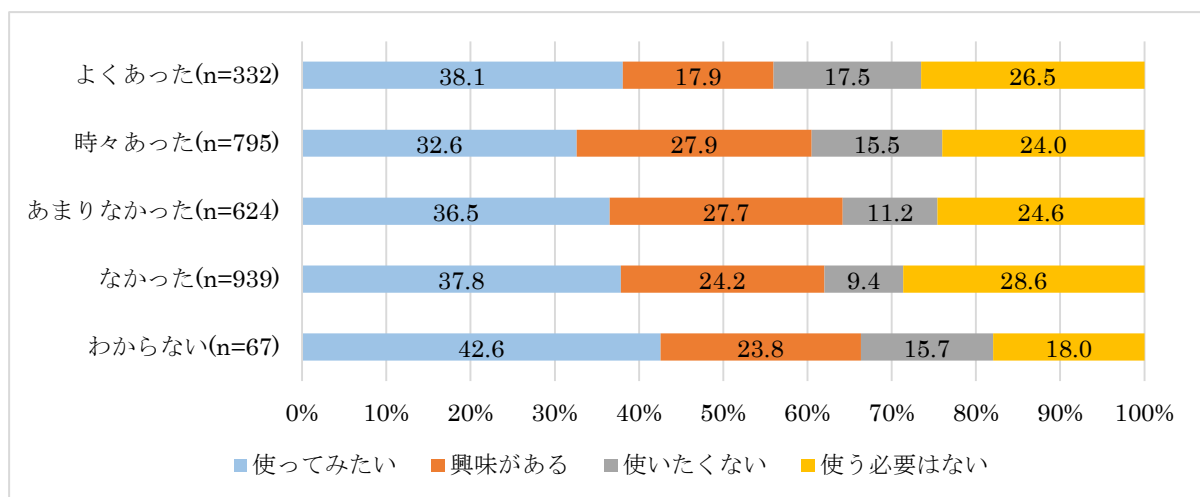
図表 2-1-7-9 家の人がない時、夕ごはんを皆で食べられる場所の利用意向(16-17 歳):「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験有無別(***)



*無回答は除く。

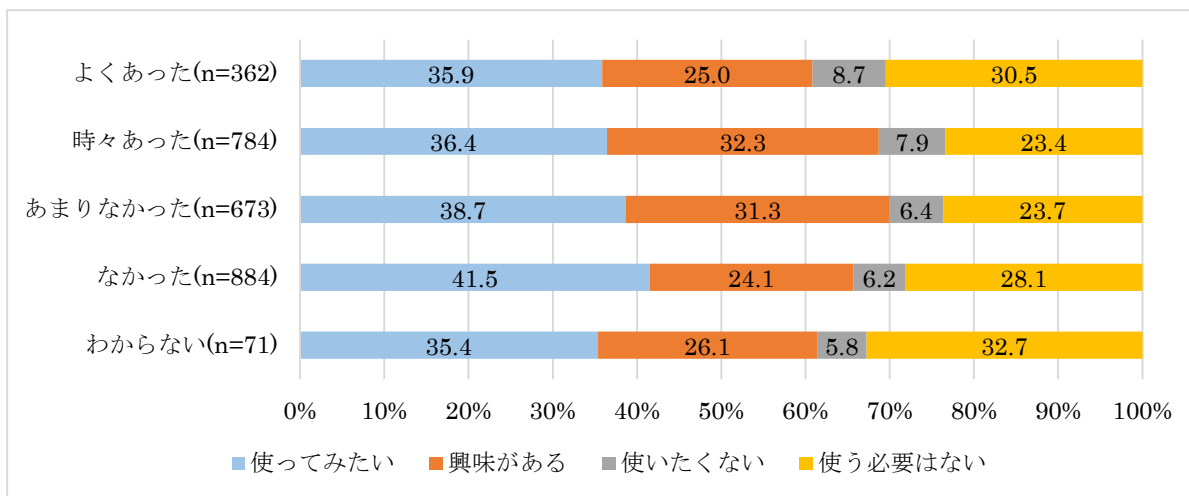
「家で勉強ができない時、静かに勉強ができる場所」については、16-17 歳では差が見られない (図表省略)。また小学 5 年生、中学 2 年生でもその差は小さく、中学 2 年生の不登校傾向がない子供でやや高い傾向が見られる (図表 2-1-7-10、2-1-7-11)。

図表 2-1-7-10 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所の利用意向(小学 5 年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



*無回答は除く。

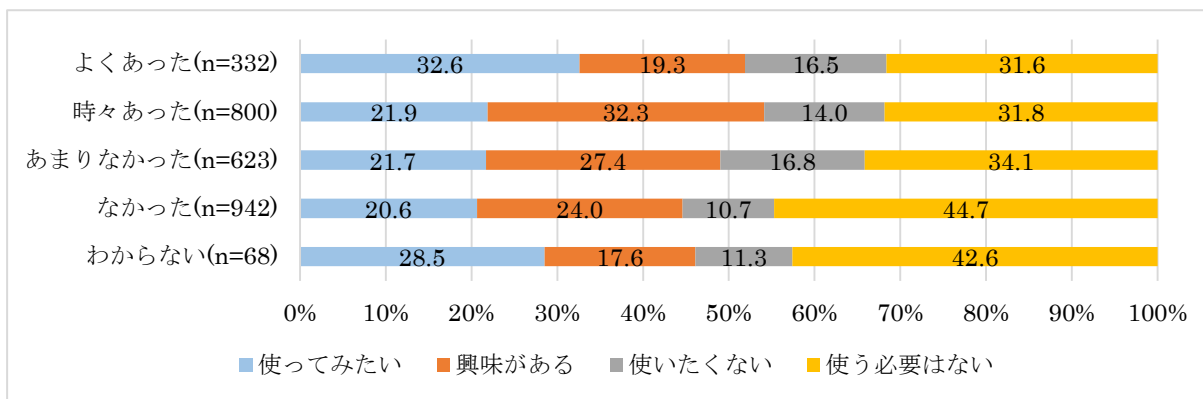
図表 2-1-7-11 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所の利用意向(中学2年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



*無回答は除く。

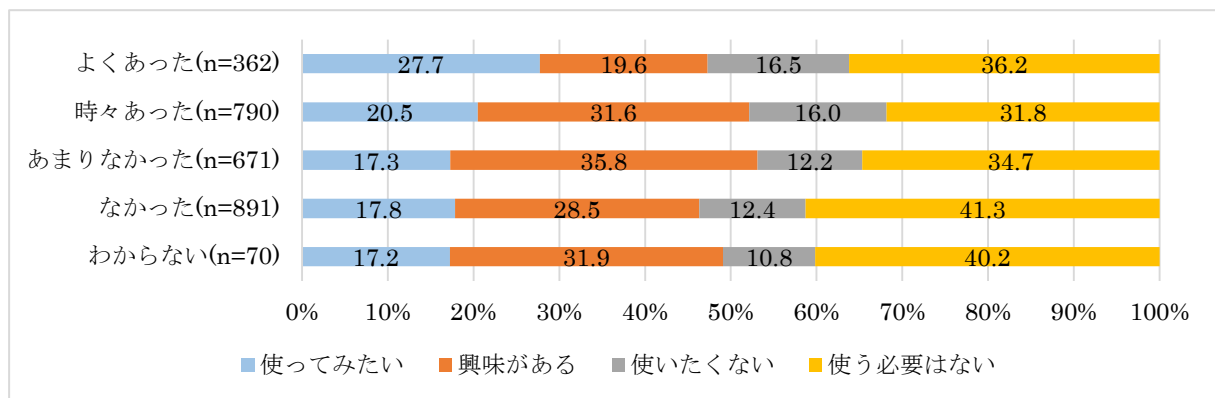
「学校以外でなんでも相談できる場所」の利用意向は、全ての年齢において不登校傾向がある子供で高い。学校に行きたくないと思った経験がよくあった子供のうち「使ってみたい」と回答した子供は、小学5年生で32.6%、中学2年生で27.7%、16-17歳で22.5%であった(図表 2-1-7-12、2-1-7-13、2-1-7-14)。

図表 2-1-7-12 学校以外でなんでも相談できる場所の利用意向(小学5年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



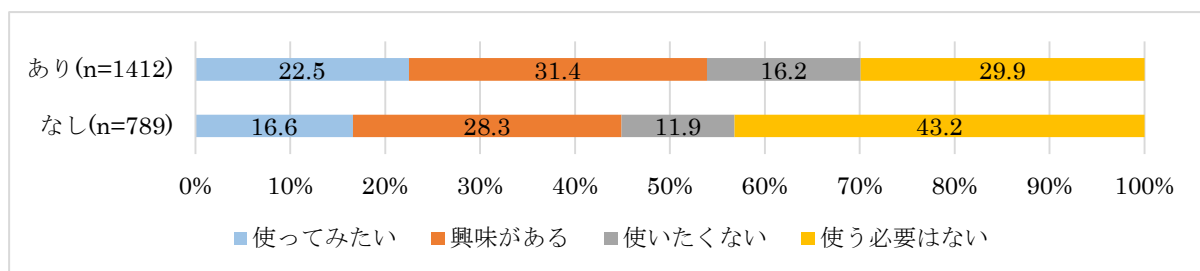
*無回答は除く。

図表 2-1-7-13 学校以外でなんでも相談できる場所の利用意向(中学 2 年生):「学校に行きたくないと思った」頻度別(***)



*無回答は除く。

図表 2-1-7-14 学校以外でなんでも相談できる場所の利用意向(16-17 歳):「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」経験有無別(***)



*無回答は除く。

8 支援の方向性

分析から、実際に不登校になる子供は数% (図表 2-1-1-1。小学 5 年生「よくあった」0.5%、「時々あった」0.7%、中学 2 年生「よくあった」1.9%、「時々あった」0.8%) であるが、「学校に行きたくない」と頻繁に感じている子供の割合は高く、小学 5 年生、中学 2 年生、16-17 歳でそれぞれ 11.8%、12.7%、31.7% であることがわかった (図表 2-1-1-2、2-1-1-3)。16-17 歳で設問内容が異なるものの、全体的に年齢が上がるにつれ、割合が増加する傾向が見られる。

不登校傾向がある子供は、生活困難層、ひとり親世帯に多く出現するものの、より顕著に表れるのが、授業がわからない子供、仲の良い友達がいない子供、いじめられた経験を持つ子供であった。これらの知見は、想像どおりであるが、データとして示された意義は大きい。これらは、全て、生活困難層全体の特徴ともいえるが、困窮層の子供の中で、不登校傾向のある子供とない子供を比べると、さらに不登校傾向の子供の特徴が浮き彫りとなる。その結果、不登校傾向があり、かつ生活に困窮している子供は、授業がわからなくなる時期が早く、また、学校生活においては、5 教科以外の実技系の教科、クラブ活動、給食・弁当の時間までも楽しんでいる子供が少ないことがわかった。

これらの結果から、不登校傾向がある子供たちが楽しいと感じる時間・場所を学校内外に増やすことが重要である。不登校傾向のある子供たちは、「家以外で平日の放課後に夜までいられる場所」、「家以外で休日にいることができる場所」、「家の人がいない時、夕ごはんを皆で食べられる場所」などの利用意向が若干高くなっており、さらに、「学校以外でなんでも相談できる場所」の利用意向も高い。これら、学校外における居場所事業は、子供の貧困対策としてだけでなく、不登校傾向のある子供への支援とも位置付けられるであろう。

参考文献

文部科学省 (2014) 『不登校生徒に関する追跡調査報告書』.

文部科学省 (2017) 『平成 28 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』.

村田豊久他 (1996) 「学校における子どものうつ病——Birleson の小児期うつ病スケールからの検討—」『最新精神医学』 1: 131-138.

お茶の水女子大学 (2014) 『平成 25 年度 全国学力・学習状況調査 (きめ細かい調査) の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究』.

第2章 いじめられた経験のある子供たち

内藤朋枝（首都大学東京 子ども・若者貧困研究センター）

はじめに

いじめの問題は、子供たちの毎日の生活の質を下げる大きな問題です。2015年に実施されたOECD（経済協力開発機構）「生徒の学習到達度調査」（PISA：Programme for International Student Assessment）によると、日本において「他の生徒にからかわれた経験」を持つ子供の割合（17.0%）は、72の調査対象国・地域の中で6番目に高く、「他の生徒にたたかれたり、押されたりした経験」を持つ子供の割合（8.9%）は、調査対象国・地域中、3番目に高いとのことです（国立教育政策研究所 2017）。

いじめの特徴は、被害者と加害者の間で加害者が一方的に優位であること、また、いじめにあって被害者の心身の健康が阻害され、自信や意欲の喪失などを引き起こすことです。また、いじめ防止に関しては、教員の役割が大きく、教員がいじめ防止に積極的であると、いじめが起こった時に早く対応がなされることがOECDの調査からもわかっています。

すなわち、学校や児童関連施設などの現場においては、まず、教員がいち早くいじめを感知することが重要と言えます。そのためには、教員が普段から、どれくらいの子供がいじめにあったことがあると感じているのか（問題の規模の把握）、また、どのような子供がいじめ被害にあいやすいのかを知っておくことが重要です。

分析の目的

本章では、いじめられたと回答した子供を「いじめの被害者」として、どのような子供が被害にあっているのかを確認し、大人たちがどのような手を差し伸べられるのかを検討します。本章で用いる「いじめ」の定義は、子供たち自身の自己申告によるものです。いじめの多くが、大人の気づかないところで発生しているであろうことを考えると、大人が把握しているいじめの発生件数は実際の発生件数よりも大幅に少ないと考えられます。本章では、子供たちが匿名でまた保護者や教員が見ることができない形で答えたアンケート調査の結果を用いることにより、いじめの実態を明らかにしていきます。

1 いじめられた経験のある子供の割合

この報告で「いじめられた経験のある子供」とは、小学5年生、中学2年生では「「いじめられた」ことがありましたか」の設問で、「よくあった」、「時々あった」と回答した子供、16-17歳では、現在学校に在籍している子供のうち、「学校をやめたくなるほど、悩んだことがありますか」という調査項目に対して「いじめにあった」と回答した子供たちを指す。

まず、いじめられた経験がある子供の割合を見ると、小学5年生で16.3%（「よくあった」3.9%、「時々あった」12.4%）、中学2年生で9.3%（「よくあった」2.5%、「時々あった」6.8%）、16-17歳で3.7%である（図表2-2-1-1、2-2-1-2）。

図表 2-2-1-1 いじめられた経験の頻度(小学5年生、中学2年生)

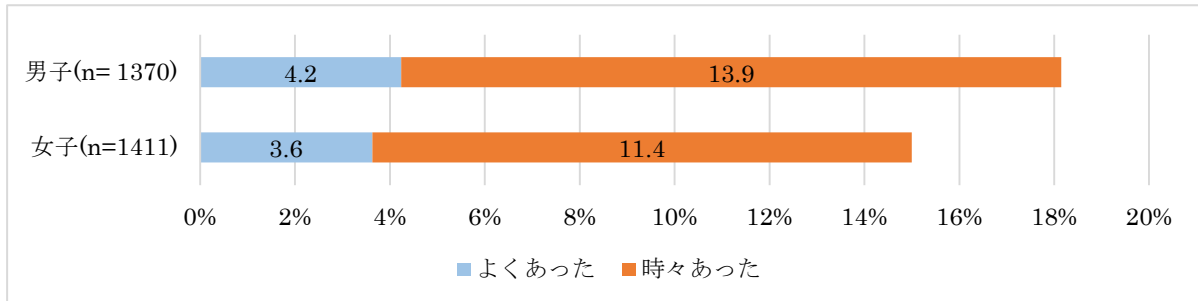
	小学5年生 (n=2833)	中学2年生 (n=2848)
よくあった	3.9	2.5
時々あった	12.4	6.8
あまりなかった	13.1	10.7
なかった	65.1	75.0
わからない	3.6	3.7
無回答	1.9	1.4
合計	100	100

図表 2-2-1-2 いじめられた経験の有無(16-17歳)

	16-17歳 (n=2560)
あり	3.7
なし	84.1
無回答	12.2
合計	100

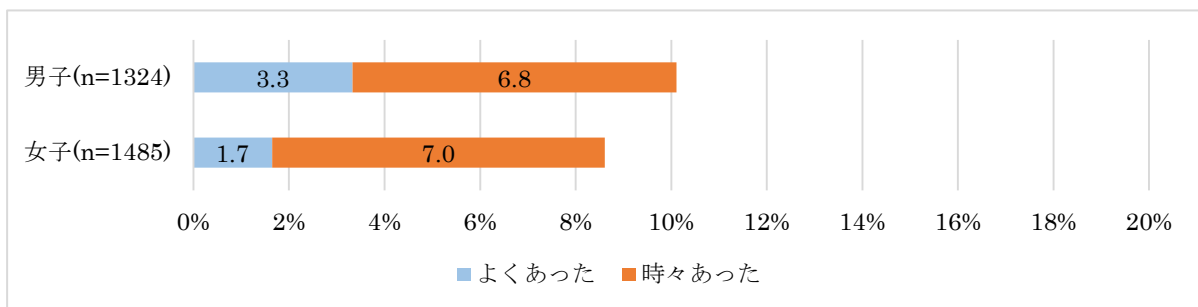
さらに男女別にいじめられた経験があると回答した子供の割合を見ると、小学5年生、中学2年生では男子の方が、女子に比べて若干高くなっている（図表2-2-1-3、2-2-1-4）。しかし、16-17歳では男子よりも女子の方がいじめられた経験がある割合が高い（図表2-2-1-5）。

図表 2-2-1-3 いじめられた経験の頻度(小学5年生):性別(***)



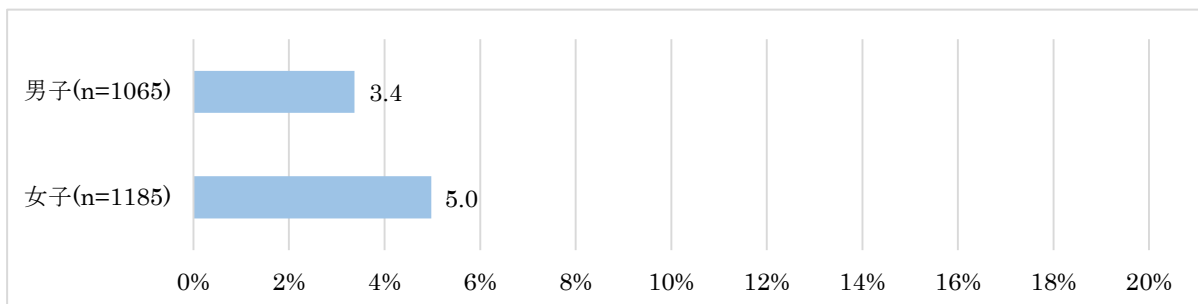
*無回答を除く

図表 2-2-1-4 いじめられた経験の頻度(中学2年生):性別(**)



*無回答を除く

図表 2-2-1-5 いじめられた経験のある子供の割合(16-17歳):性別(**)



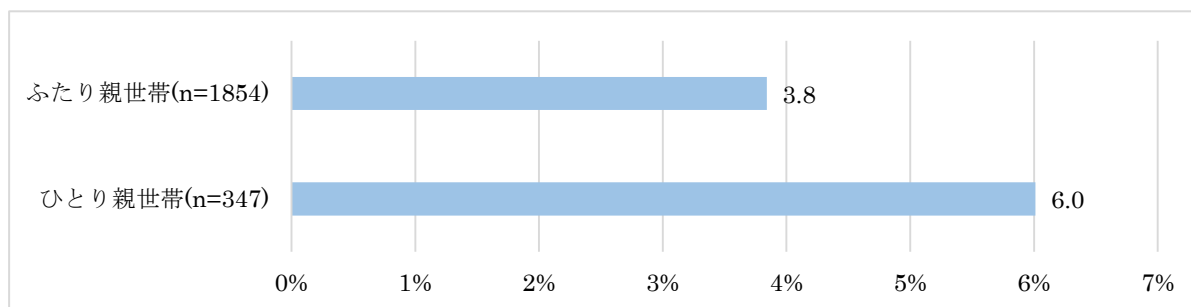
*無回答を除く

2 家庭の状況

(1) 世帯タイプ、生活困難度別

どのような子供がいじめにあいやすいのかを確認するために、世帯タイプ別にいじめられた経験の割合を見た。小学5年生と中学2年生ではひとり親世帯かふたり親世帯かでいじめられた経験が多いといった傾向は見られない。一方、16-17歳ではひとり親世帯でいじめの経験があると回答する子供の割合が高く6.0%（ふたり親世帯では3.8%）であった（図表2-2-2-1）。

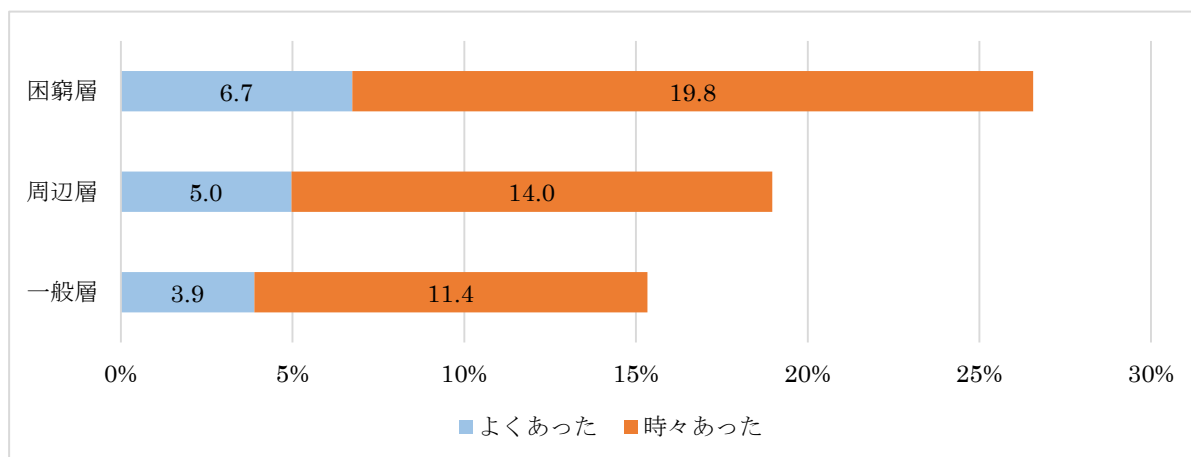
図表 2-2-2-1 いじめられた経験のある子供の割合(16-17歳):世帯タイプ別(*)



*無回答を除く

生活困難度別では、小学5年生のみで有意な差が見られた。困窮層でいじめられた経験があると回答する割合が最も高く6.7%、次に、周辺層、一般層の順となっている。困窮層においては、「よくあった」(6.7%) 又は「時々あった」(19.8%) と答えた小学5年生が26.5%であり、4人に1人以上となっている（図表2-2-2-2）。中学2年生、16-17歳においては、生活困難度別に統計的に有意な差は検証されなかった。

図表 2-2-2-2 いじめられた経験の頻度(小学5年生):生活困難度別(**)

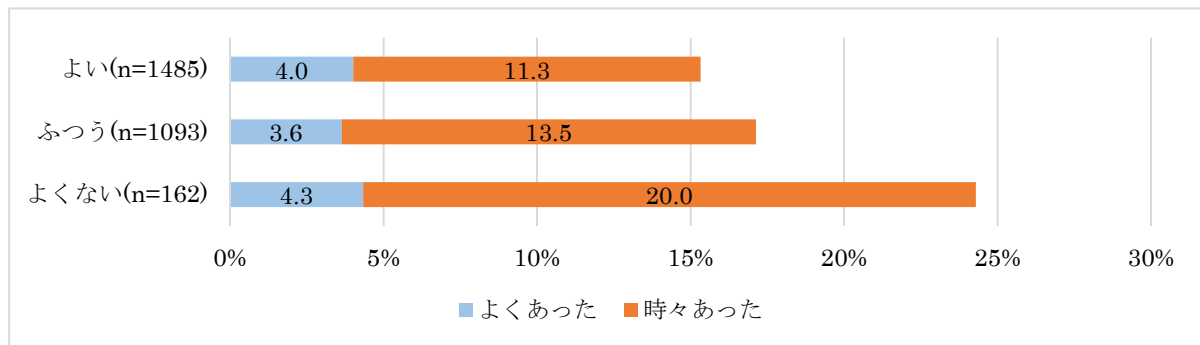


*無回答を除く

(2) 保護者の健康状態

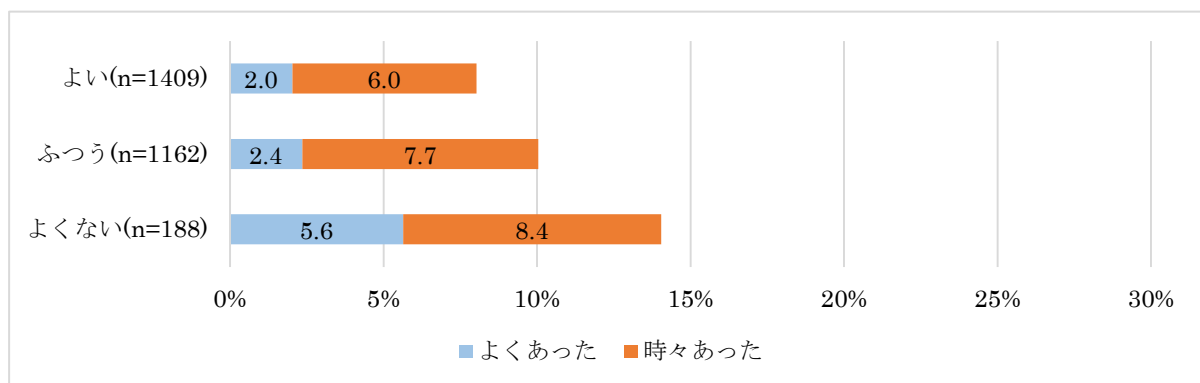
興味深いのは、保護者の健康状態と子供のいじめ被害の関連が確認されたことである。小学 5 年生、中学 2 年生ではいずれも、保護者の健康状態が「よくない」子供でいじめられた経験が「よくあった」、「時々あった」と回答する割合が高く、小学 5 年生は 24.3%（「よくあった」4.3%、「時々あった」20.0%）、中学 2 年生は 14.0%（「よくあった」5.6%、「時々あった」8.4%）であった（図表 2-2-2-3、2-2-2-4）。保護者の健康状態が「ふつう」、「よい」であると、この割合が低下する傾向がある。保護者の健康状態が直接的に子供のいじめに関連しているとは考えにくいですが、保護者の健康状態がよくないことで、いじめの被害の発覚が遅れる、不登校などになりやすい、学力が低下しやすいなど、何らかメカニズムが働いている可能性がある。また、この関連は、単なる相関であり、因果関係ではないため、「見せかけの相関」である可能性もある。すなわち、いじめと母親の健康状態の両方に影響する第三の要因が背後にある可能性がある。なお、16-17 歳では関連性は見られなかった。

図表 2-2-2-3 いじめられた経験の頻度(小学 5 年生):保護者の健康状態別(**)



*無回答を除く

図表 2-2-2-4 いじめられた経験の頻度(中学 2 年生):保護者の健康状態別(***)



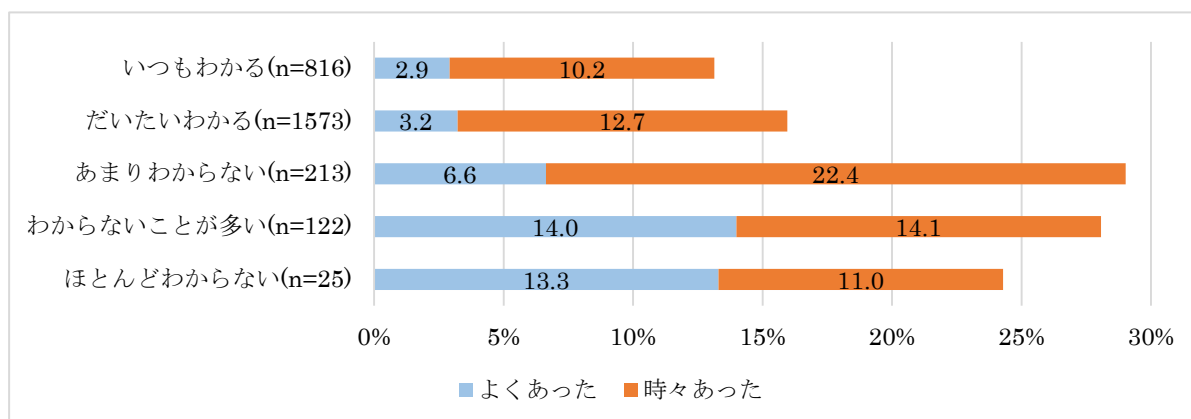
*無回答を除く

3 学力といじめられた経験

(1) 授業の理解度といじめ

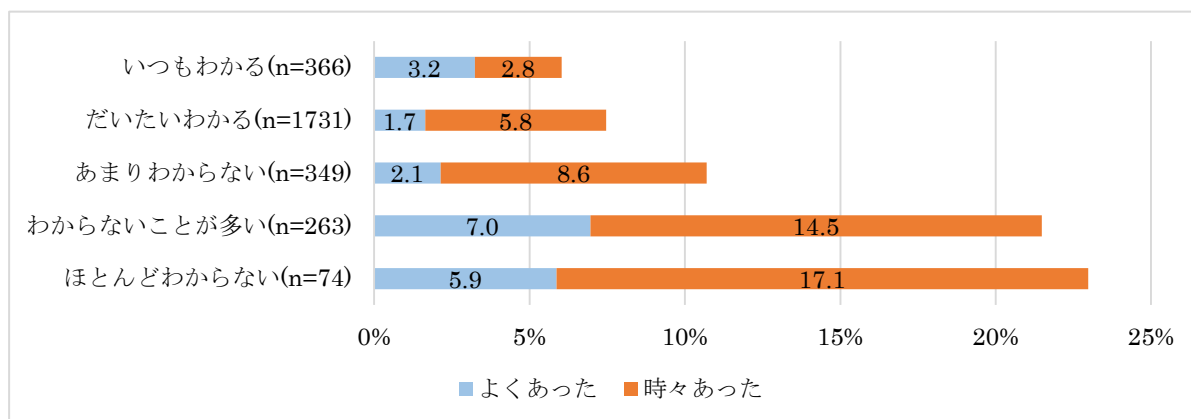
学力面において、いじめられた経験のある子供の特徴を見た。小学5年生と中学2年生においては、いじめと学力には明らかに関係性を見ることができる。学校の授業がわからない子供ほど、いじめられた経験があると回答する割合が高い。小学5年生では、授業が「わからないことが多い」子供の14.0%、「ほとんどわからない」子供の13.3%でいじめられた経験が「よくあった」が、授業が「いつもわかる」あるいは「だいたいわかる」子供においては「よくあった」は2.9%、3.2%と比較的低い(図表2-2-3-1)。この傾向は中学2年生でも同様で、授業が「わからないことが多い」子供の7.0%、「ほとんどわからない」子供の5.9%でいじめられた経験が「よくあった」が、授業が「いつもわかる」あるいは「だいたいわかる」子供においては「よくあった」は3.2%、1.7%と比較的低い(図表2-2-3-2)。なお、16-17歳では、授業の理解度別には、いじめの経験率に差が見られなかった(図表省略)。

図表 2-2-3-1 いじめられた経験の頻度(小学5年生):授業の理解度別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-3-2 いじめられた経験の頻度(中学2年生):授業の理解度別(***)

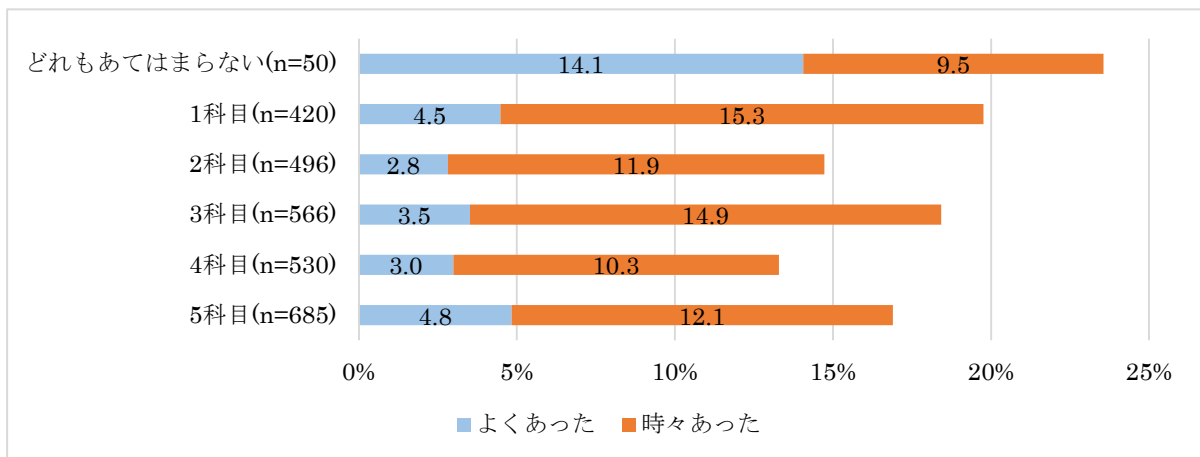


*無回答を除く

(2) 得意な科目の数

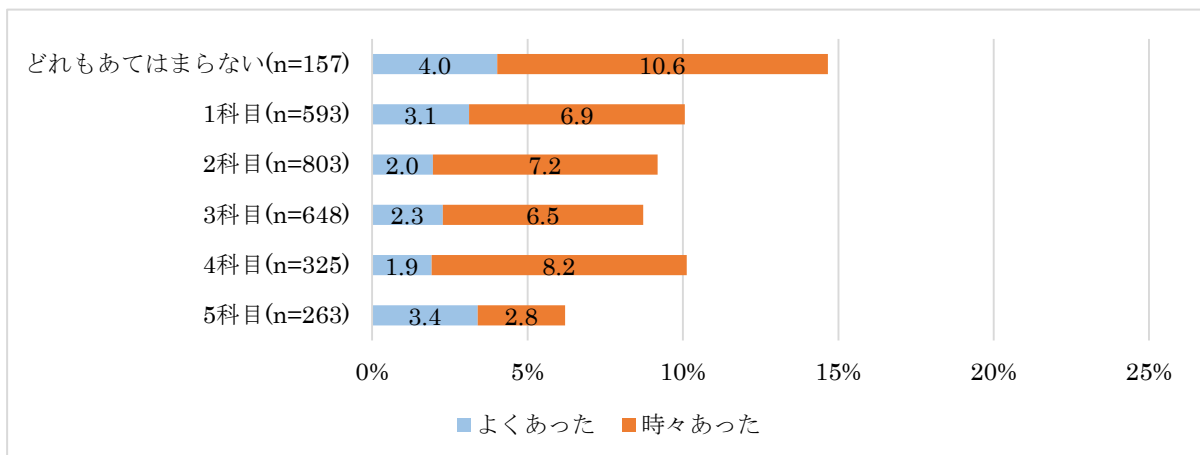
得意な科目の有無と数別に、いじめられた経験に違いがあるかを見た。すると、得意科目の数が多い子供ほどいじめにあいにくい、又はあいやすいという一貫とした傾向は見られなかったものの、「どれもあてはまらない」(得意科目がない)と回答した子供は、いじめられた経験が「よくあった」と回答する割合が顕著に高く、小学5年生では14.1%、中学2年生では4.0%となっている(図表2-2-3-3、2-2-3-4)。ここでも16-17歳では差は見られない。すなわち、少なくとも、調査データで見る3学年の比較においては、年齢が低い子供ほど、得意科目の有無といじめ経験の関連が強い。特に小学校では、「どれもあてはまらない」子供については、いじめの対象とならないか注意する必要があるだろう。

図表 2-2-3-3 いじめられた経験の頻度(小学5年生):得意科目の数別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-3-4 いじめられた経験の頻度(中学2年生):得意科目の数別(*)



*無回答を除く

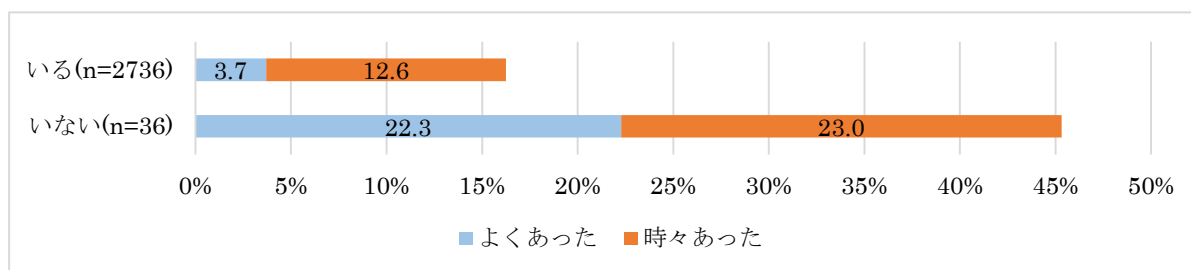
4 人間関係

(1) 一番仲の良い友達の有無

子供たちの交友関係からいじめ被害の傾向を見ていく。当然ながら仲の良い友達がいるかどうかといじめの関連性は深いことが想像できる。

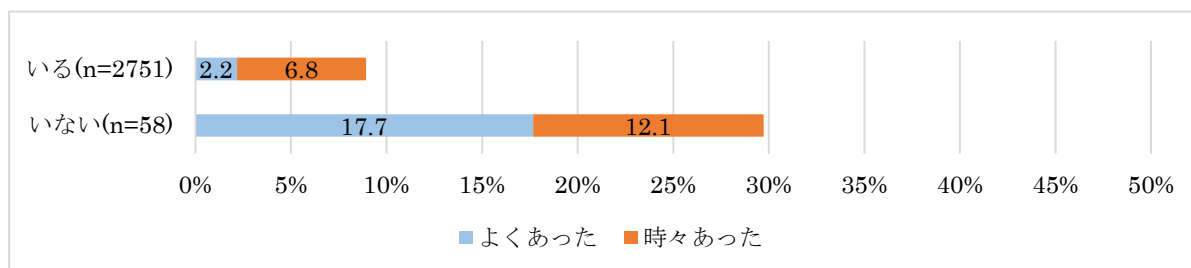
仲の良い友達が「いない」と回答する子供は、いじめられた経験があると回答する割合が比較的高く、この傾向は全ての年齢層で確認される（図表 2-2-4-1、2-2-4-2、2-2-4-3）。調査票では、いじめられた経験を聞いているので、現在もいじめられているかどうかは不明である。そのため、この結果は、いじめられている子供は孤独な状態に置かれていると解釈することも可能であり、同時にいじめられた経験によって仲の良い友達を作れずにいる状況にあるなどの解釈が可能である。

図表 2-2-4-1 いじめられた経験の頻度(小学 5 年生): 仲の良い友達の有無別(***)



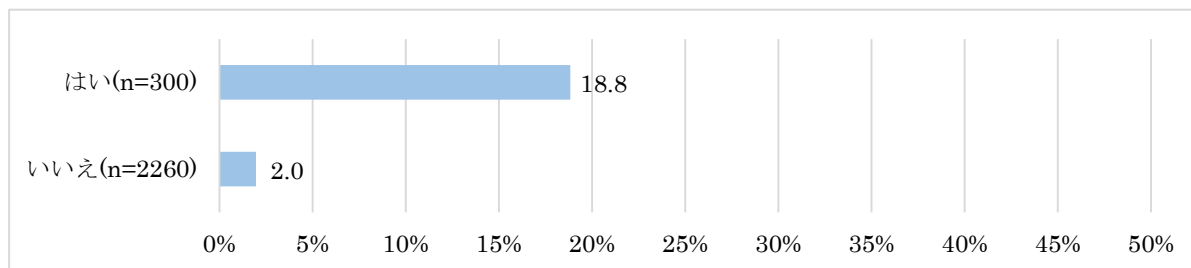
*無回答を除く

図表 2-2-4-2 いじめられた経験の頻度(中学 2 年生): 仲の良い友達の有無別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-4-3 いじめられた経験のある子供の割合(16-17 歳): 友人とうまく関われない(***)

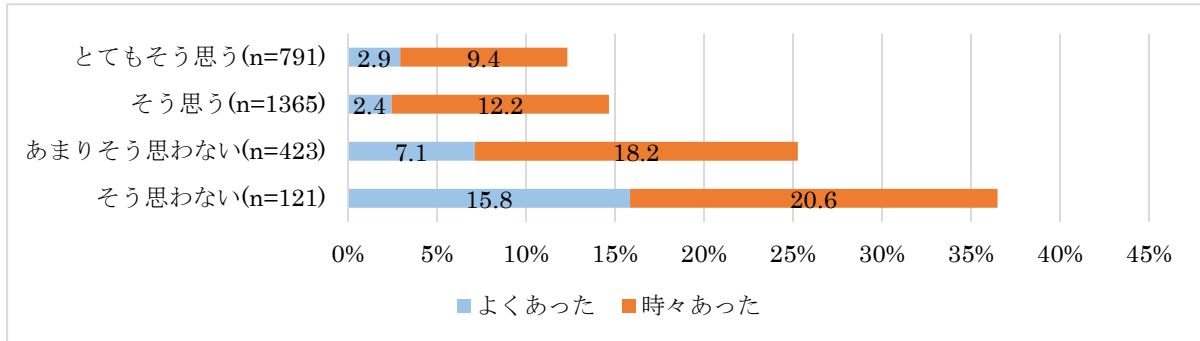


*無回答を除く

(2) 友人関係における主観—「好かれていると思う」

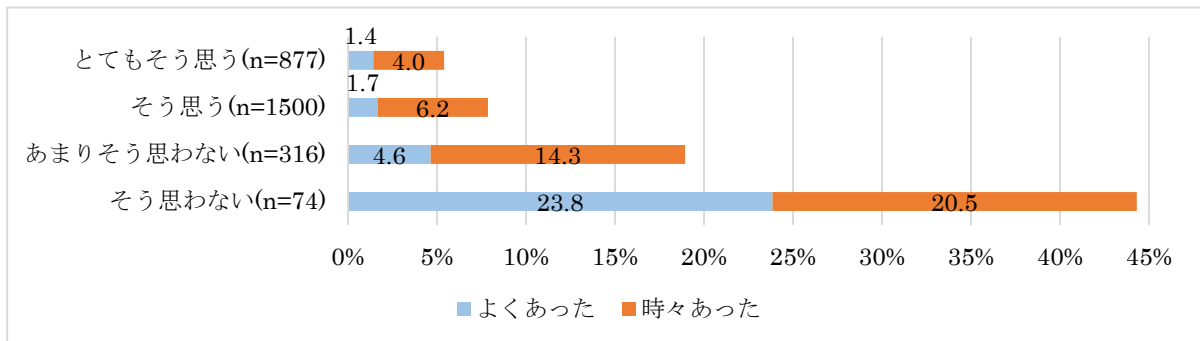
「(あなたは) 友達に好かれていると思うか」という設問に対しての回答別に、いじめられた経験を見た。ここでも全ての年齢層において、友達に好かれていると思わない子供の方が、いじめられた経験があると回答する傾向がある(図表 2-2-4-4、2-2-4-5、2-2-4-6)。

図表 2-2-4-4 いじめられた経験(小学 5 年生):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)



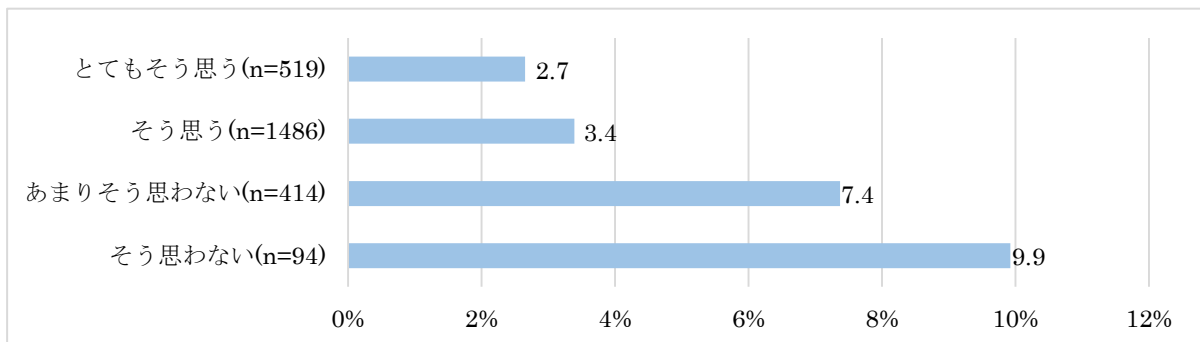
*無回答を除く

図表 2-2-4-5 いじめられた経験(中学 2 年生):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-4-6 いじめにあった(16-17 歳):「友達に好かれていると思うか」の回答別(***)



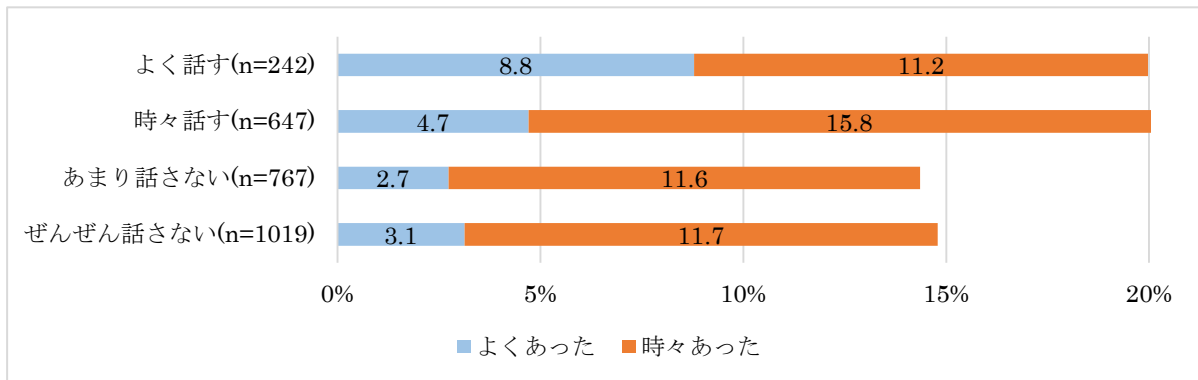
*無回答を除く

(3) 会話の頻度—学校の先生

いじめられた経験がある子供は、教員との関係は良好なのであろうか。冒頭に述べたように、いじめの対策には、教員の関わりが大きい。教員との関係が普段から良好な場合は、いじめにあったとしても、それを教員に相談することも可能であろう。

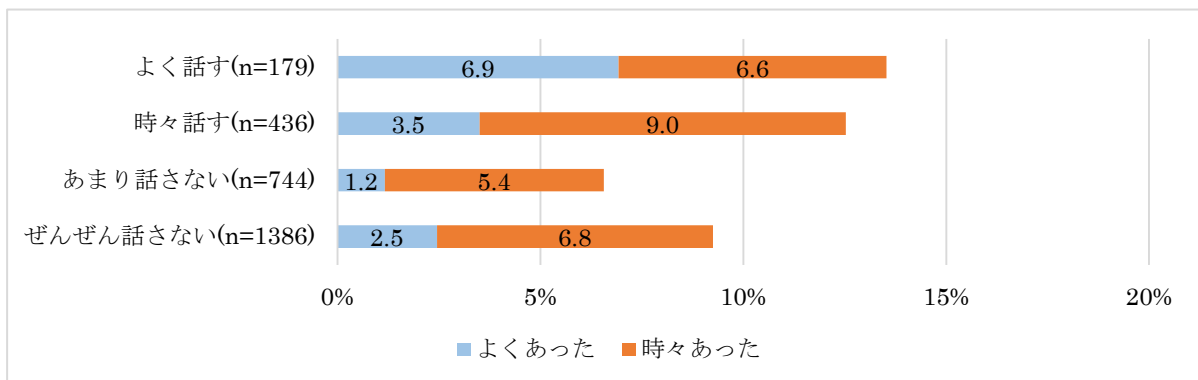
そこで、教員との会話の頻度別に、いじめの経験率を見ていくことにする。小学5年生では、いじめられた経験が「よくあった」と回答した子供の割合が最も高かったのは、教員と「よく話す」子供 8.8%であった（図表 2-2-4-7）。中学2年生でも同様に、教員と「よく話す」子供において、いじめられた経験があると回答した子供の割合が最も高い（図表 2-2-4-8）。

図表 2-2-4-7 いじめられた経験(小学5年生):学校の先生との会話の頻度別(***)



*無回答を除く

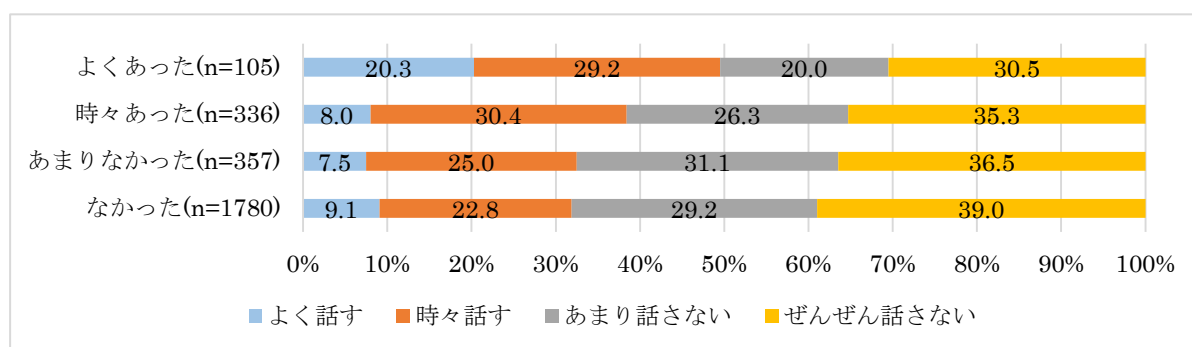
図表 2-2-4-8 いじめられた経験(中学2年生):学校の先生との会話の頻度別(***)



*無回答を除く

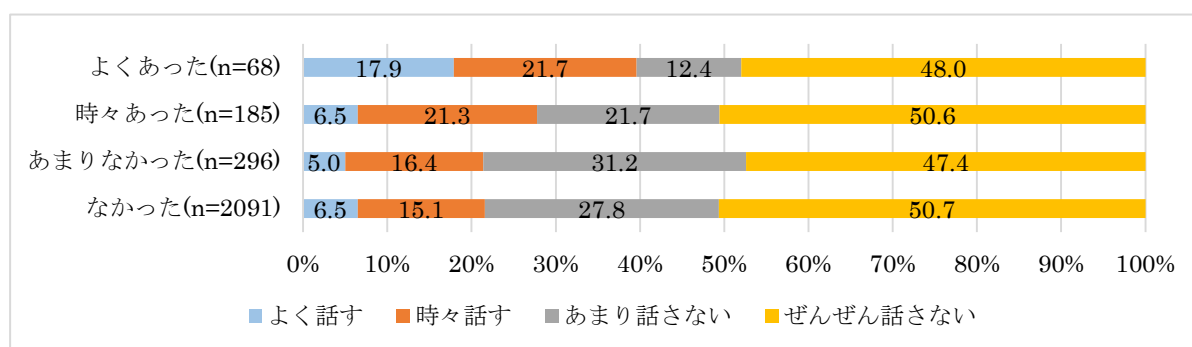
また、いじめられた経験別に教員との会話の頻度を見ても、いじめられた経験が「よくあった」、「時々あった」子供ほど、教員と「よく話す」、「時々話す」を合算した割合が高い傾向にある（図表 2-2-4-9、2-2-4-10）。教員との会話の内容まではわからないが、いじめられた経験を持つ子供の方が、そうでない子供よりも教員と会話する頻度が高い傾向にあるといえる。ただし、同時に、いじめが「よくあった」と答える子供の中で、教員と「全然話さない」、「あまり話さない」子供も小学 5 年生で 50.5%（「全然話さない」30.5%、「あまり話さない」20.0%）、中学 2 年生で 60.4%（「全然話さない」48.0%、「あまり話さない」12.4%）存在することも忘れてはならない（図表 2-2-4-9、2-2-4-10）。

図表 2-2-4-9 学校の先生との会話の頻度(小学 5 年生):いじめられた経験別(***)



*「無回答」を除く。

図表 2-2-4-10 学校の先生との会話の頻度(中学 2 年生):いじめられた経験別(***)

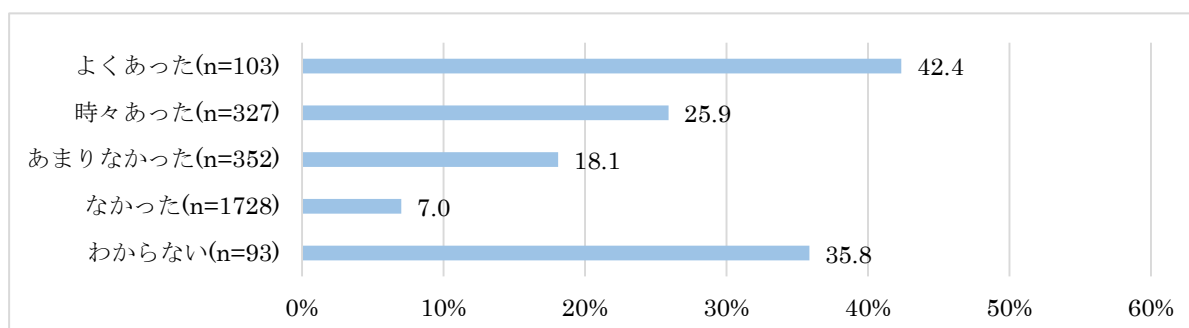


*「無回答」を除く。

5 抑うつ傾向

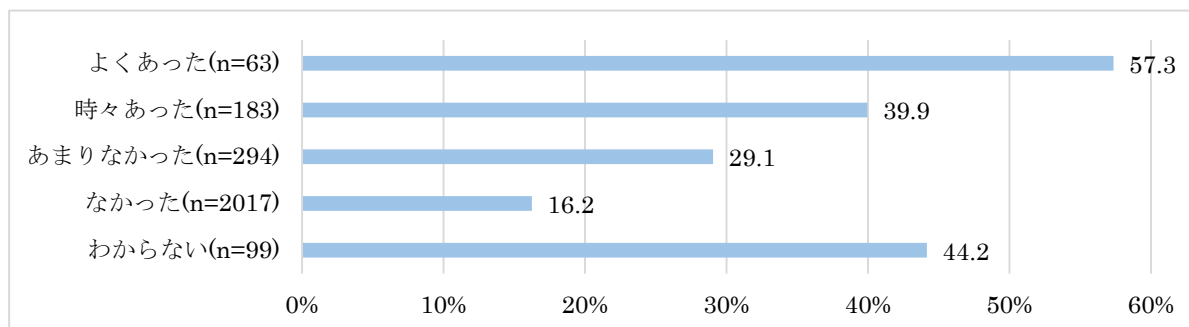
「いじめ」が子供の心理的状态に悪影響を及ぼすことは想像に難くない。実際に、多くの研究がいじめられた経験と抑うつ傾向の関係性を明らかにしている（森田 2010、伊藤 2017 など）。2部1章で用いた「バールソン児童抑うつ性尺度」に基づく、いじめられた経験と抑うつ傾向の関連については、全ての年齢層で有意な関連が見られた（図表 2-2-5-1、2-2-5-2、2-2-5-3）。小学5年生、中学2年生とも、いじめられた経験について、「よくあった」、「時々あった」、「あまりなかった」、「なかった」と答えた子供の順に、抑うつ傾向のある者の割合が高い。また、16-17歳においても、いじめられた経験がある者の方が抑うつ傾向のある割合が高い。なお、「バールソン児童抑うつ性尺度」は、あくまで子供の精神的な状態を示すものであり、疾患の有無を判断するものではない。

図表 2-2-5-1 抑うつ傾向のある子供の割合(小学5年生):いじめられた経験の頻度別(***)



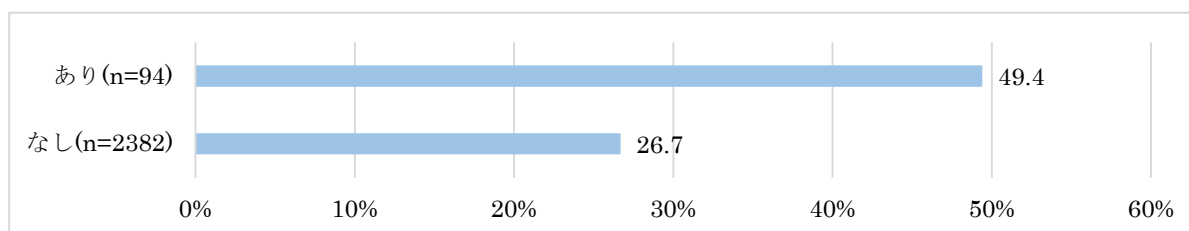
*無回答を除く

図表 2-2-5-2 抑うつ傾向のある子供の割合(中学2年生):いじめられた経験の頻度別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-5-3 抑うつ傾向のある子供の割合(16-17歳):いじめられた経験の有無別(***)



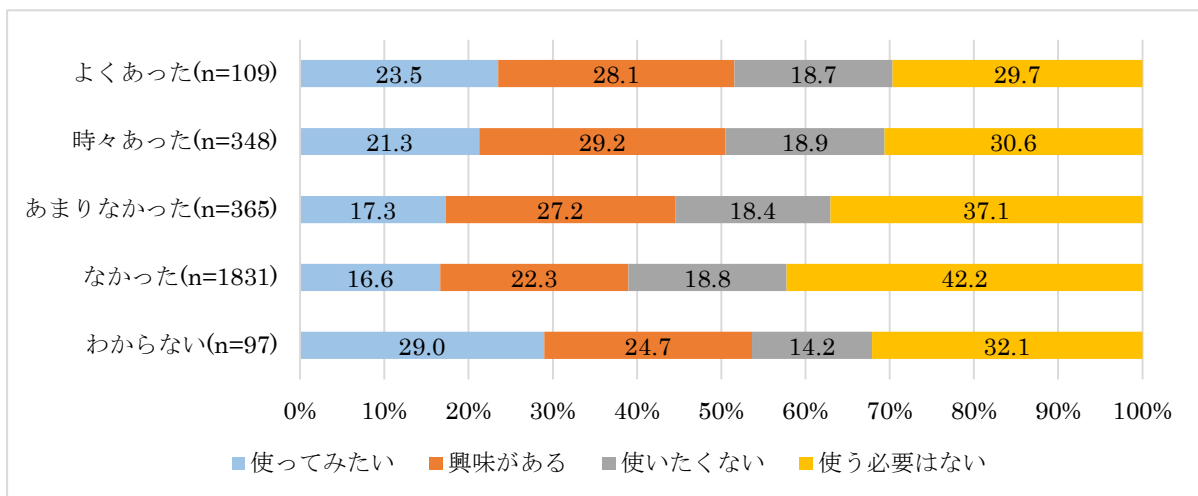
*無回答を除く

6 支援事業の利用意向

最後に、いじめにあった子供がどのような支援を必要としているかを、いじめられた経験がない子供との比較の中から、見ていく。

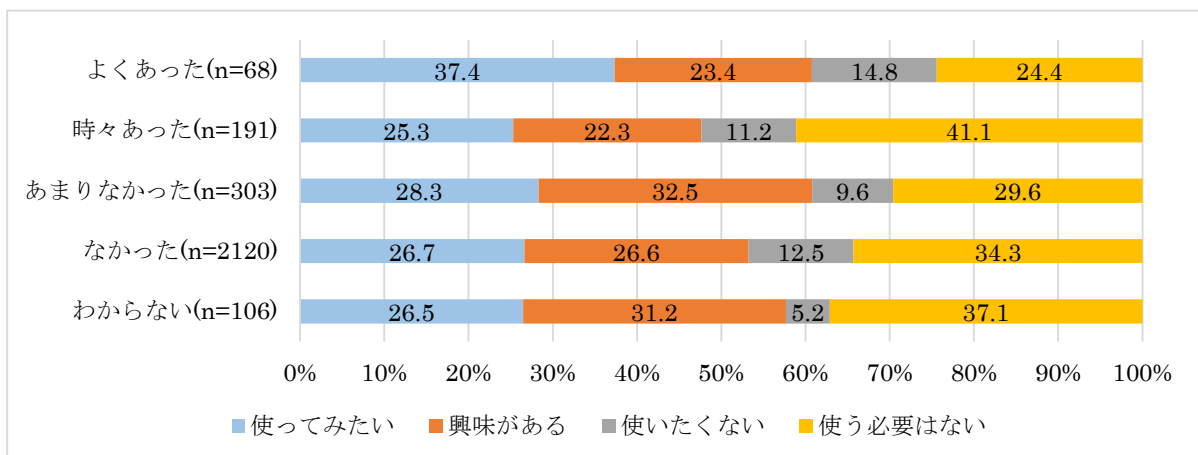
「(家以外で) 平日の放課後に夜までいることができる場所」の利用意向は、小学5年生、中学2年生、で、いじめられた経験が「よくあった」と回答した子供の利用意向が高く、小学5年生では23.5%、中学2年生の37.4%が「使ってみたい」と回答している(図表2-2-6-1、2-2-6-2)。16-17歳ではいじめられた経験の有無による差が見られなかった(図表省略)。

図表 2-2-6-1 「(家以外で)平日の放課後に夜までいることができる場所」の利用意向(小学5年生):いじめられた経験の頻度別(***)



*無回答を除く *無回答を除く

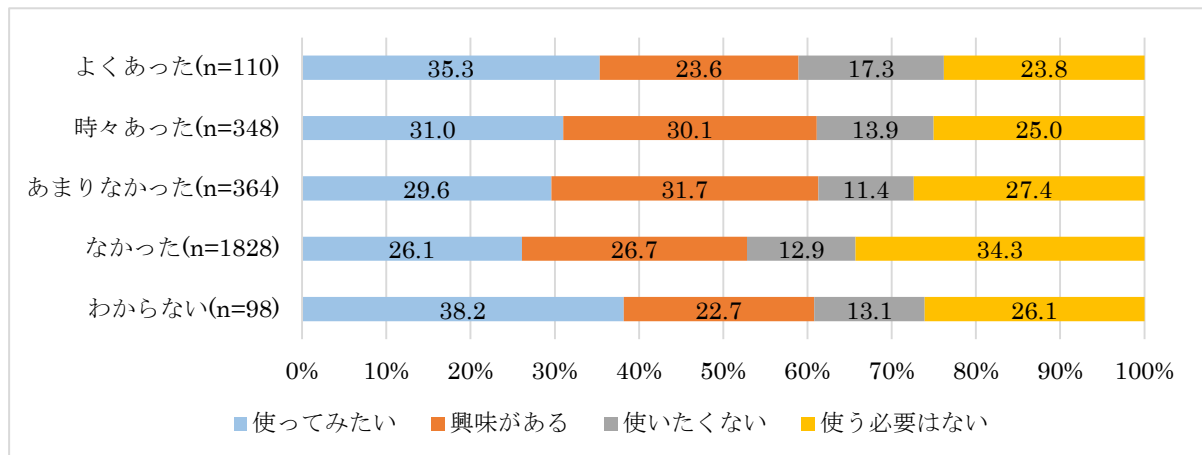
図表 2-2-6-2 「(家以外で)平日の放課後に夜までいることができる場所」の利用意向(中学2年生):いじめられた経験の頻度別(**)



*無回答を除く

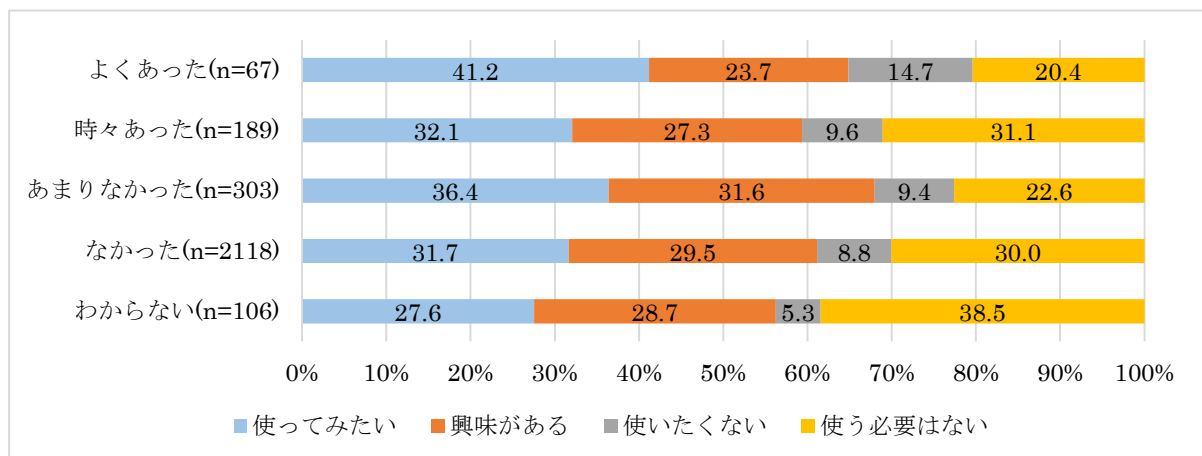
「(家以外で) 休日にいることができる場所」についても、いじめられた経験があると回答した子供で利用意向が高い傾向が見られる。いじめられた経験があると回答した子供のうち、小学 5 年生で 35.3%、中学 2 年生の 41.2%で利用意向が高い (図表 2-2-6-3、2-2-6-4)。ここでも 16-17 歳では差は見られなかった (図表省略)。

図表 2-2-6-3 「(家以外で)休日にいることができる場所」の利用意向(小学 5 年生):いじめられた経験の頻度別(***)



*無回答を除く

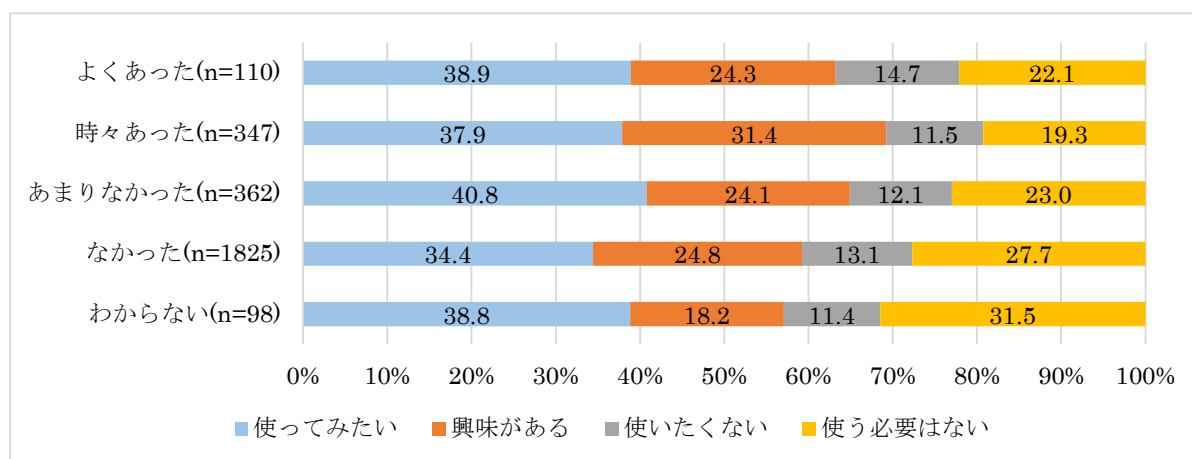
図表 2-2-6-4 「(家以外で)休日にいることができる場所」の利用意向(中学 2 年生):いじめられた経験の頻度別(*)



*無回答を除く

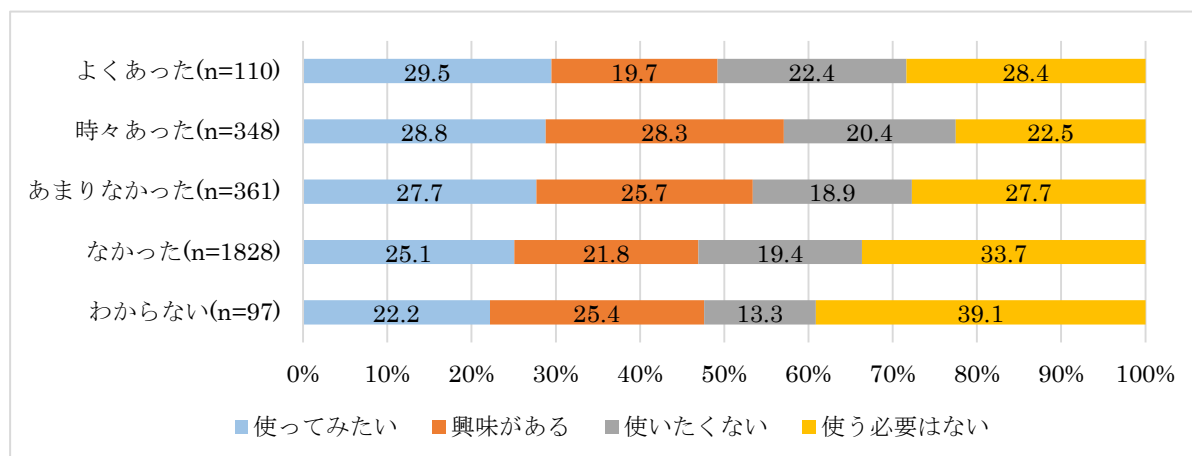
小学5年生では、いじめられた経験がある子供は「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」、そして「大学生のボランティアが、勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向がやや高い傾向がある。いじめられた経験が「よくあった」子供のうち、これらの支援事業を「使ってみたい」と回答したのは、それぞれ38.9%、29.5%であった（図表2-2-6-5、2-2-6-6）。これは、小学5年生において、学力といじめ経験に相関があったことと関連していると考えられる。

図表 2-2-6-5 「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」の利用意向(小学5年生):いじめられた経験の頻度別 (**)



*無回答を除く

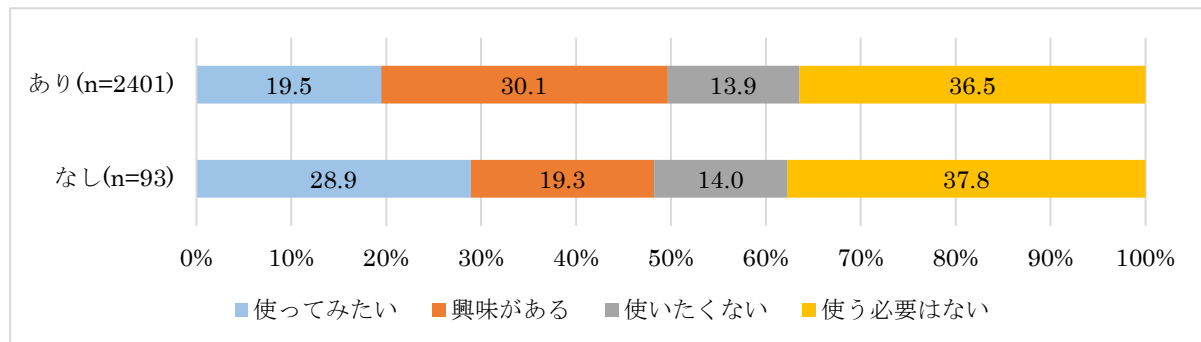
図表 2-2-6-6 「大学生のボランティアが、勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向(小学5年生):いじめられた経験の頻度別 (***)



*無回答を除く

「家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所」の利用意向については、16・17 歳のみには有意な差があり、いじめられた経験があると回答した子供の利用意向は、むしろ低い傾向にある（図表 2-2-6-7）。

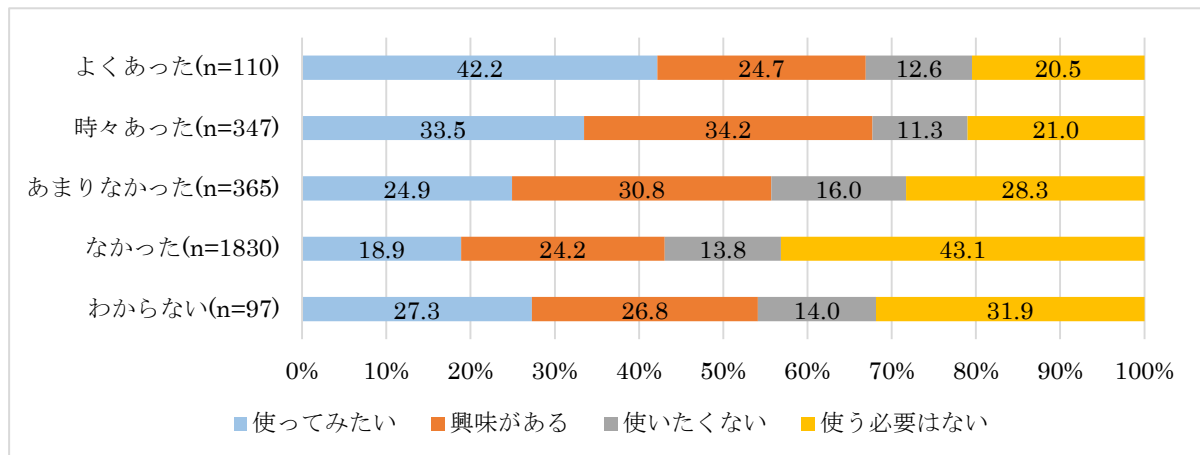
図表 2-2-6-7 「家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所」の利用意向(16-17 歳):いじめられた経験の有無別(**)



*無回答を除く

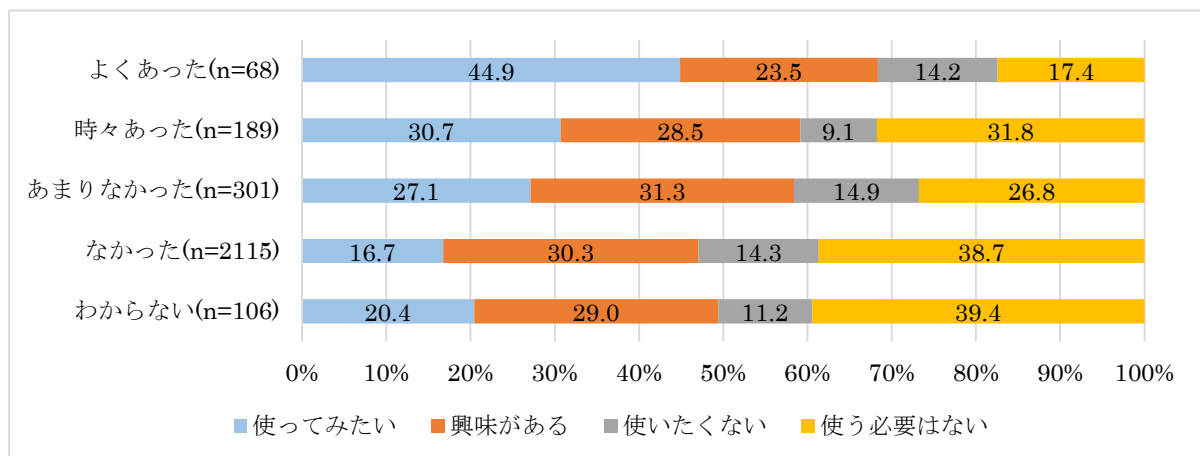
また、「(学校以外で) なんでも相談できる場所」は、いじめ対策として有効な手段と考えられる。そこで、学校以外でなんでも相談できる場所の利用意向について見たところ、小学5年生、中学2年生のうち、いじめられた経験が多いほど、「使ってみたい」と答える傾向が確認された(図表2-2-6-8、2-2-6-9)。ここでも16-17歳では差が見られなかった(図表省略)。

図表 2-2-6-8 「(学校以外で)なんでも相談できる場所」の利用意向(小学5年生):いじめられた経験の頻度別(***)



*無回答を除く

図表 2-2-6-9 「(学校以外で)なんでも相談できる場所」の利用意向(中学2年生):いじめられた経験の頻度別(***)



*無回答を除く

7 支援の方向性

本章では、いじめられた経験がある子供がどのような状況にあるのかを確認し、子供たちがどのような支援を必要としているのかを検討した。はじめに、いじめられた経験がある子供の割合は、小学5年生で16.3%、中学2年生で9.3%、16-17歳で3.7%である（図表2-2-1-1、2-2-1-2）。性別については小学5年生、中学2年生は男子が多く、16-17歳では女子で多い傾向がある（図表2-2-1-3、2-2-1-4、2-2-1-5）。

また、生活困難度や世帯タイプといった子供が属する世帯の背景については、いじめられた経験とは一貫した関連が確認されなかった。ただし、世帯タイプ別では16-17歳ではひとり親世帯の子供の方が、ふたり親世帯の子供よりもいじめられた割合が有意に高く、生活困難度別では小学5年生で困窮層と周辺層でいじめ経験が多い傾向が見られる（図表2-2-2-1、2-2-2-2）。保護者の健康状態については、小学5年生、中学2年生で差が見られ、いずれも保護者の健康状態がよくない子供でいじめられた経験があると回答する割合が高い（図表2-2-2-3、2-2-2-4）。

学業や学校生活に関しては、いじめられた経験がある子供は、得意科目が一つもなく、友人関係においても親しい友人がない割合が相対的に高いという特徴があった（図表2-2-3-3~図表2-2-4-3）。一方で、教員との会話は、いじめられた経験がない子供より多く、教員が彼らの相談役となる可能性があることが示唆される（図表2-2-4-7~図表2-2-4-10）。いじめられやすい子供たちに、教員が引き続き、きめ細かく声をかけていくことが必要であろう。

一方、いじめられた経験と支援ニーズの関連については、特に小学5年生と中学2年生において、いじめられた経験を持つ子供の方が強いニーズを持つ者の割合が高い傾向がある（図表2-2-6-1~図表2-2-6-9）。いじめられた経験が、家や学校以外の居場所へのニーズを高めている可能性がある。なお、16-17歳では「家の人がない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所」の利用意向についてのみ有意であり、しかもいじめられた経験がある子供でニーズのある者の割合が低いという結果であった（図表2-2-6-7）。16-17歳のいじめられた経験を持つ子供への支援は、「居場所支援」ととどまらない支援を検討する余地がある。

小学5年生では「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」、「大学生のボランティアが、勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向が、いじめ被害にあった子供で高かった（図表2-2-6-5、2-2-6-6）が、これは年齢が低い子供では学力といじめ被害との関連性が強いことから説明できるだろう。すなわち、小学5年生においては、学習支援がいじめ対策としても位置付けることができる。最後に「(学校以外で) なんでも相談できる場所」の利用意向は、いじめられた経験がある子供で高く（図表2-2-6-8、2-2-6-9）、相談できる場所のさらなる充実を図ることが重要である。

参考文献

伊藤美奈子（2017）「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究」『教育心理学研究』65(1): 26-36.

国立教育政策研究所（2017）『PISA2015年調査国際結果報告書 生徒の well-being』.

森田洋司（2010）『いじめとは何か——教室の問題、社会の問題』 中公新書.